

二期を許すな

—三里塚闘争勝利のために—

三里塚空港の反人民性を暴く
三里塚闘争16年のあゆみ
反対同盟は闘う
反戦の誓—三里塚を防衛し、二期攻撃を粉碎せよ



発行 三里塚闘争勝利・岩山団結会館

二期を許すな

—三里塚闘争勝利のために—

三里塚闘争は六六年七月四日、閣議決定以降今年で十七年目を迎える。

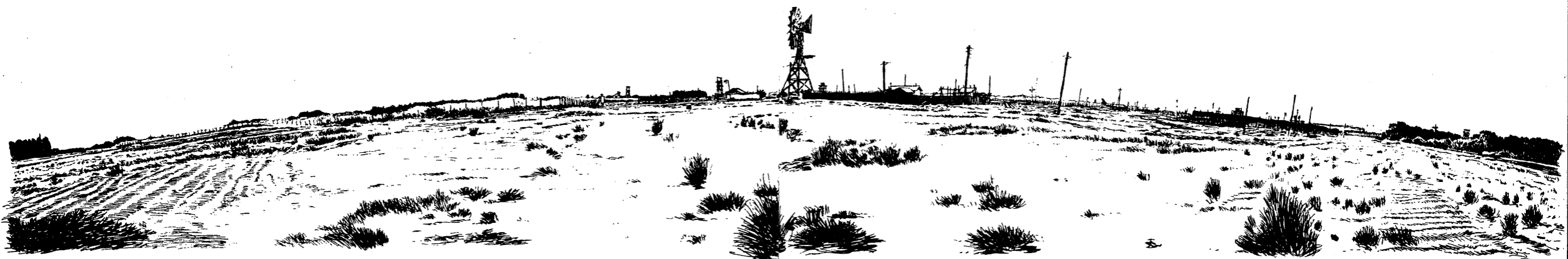
この十六年間の間に、闘いは幾多の実力闘争、戦闘を経験し、三里塚闘争は最も偉大であらゆる闘いの一大結集軸へと発展してきた。今日、闘う人民の中で、三里塚闘争を知らないものはいない。何らかの形で一度は三里塚に行つたことのある人は多いはずだ。三里塚闘争は、それほど人民の中に根つき、六〇年代・七〇年代の階級的高揚期の糸口を作り出し、しかも闘いの最先頭に常に位置してきたのである。国家権力による全くもって無暴で許すことのできない空港建設、そして農地の強奪に抗する北総台地・三里塚農民の闘いは、常に帝国主義国家権力との激突を実現し、その野望を打ち砕いてきたのだ。そのことは三里塚闘争の歴史にはつきりと刻みこまれている。

六六年六月二十八日、反対同盟の結成、そして六七年十二月日本共産党との訣別、三派全学連の結集を大きな転機としながら、三里塚闘争の今日的地平が築かれてきた。「空港反対」「公団無用、公団撃退」を掲げた反対同盟の闘いは、「農地死守―空港廃港」を思想的基礎としながら初期における砂川闘争との結合、北富士闘争との連帯等を通して、全国、全人民の守るべき一大闘争拠点として確立されてきたのだ。それは農民の「一坪の土地も売らない」という力強い闘いに立脚しつつ、その具体的表現たる強制測量阻止闘争（七〇年）第一次・第二次強制代執行阻止闘争（七一年）等々として、まさしく農地を武器に徹底抗戦を果たすという中身を創り出してきたのであった。特に第二次代執行時における大木よねさんの闘いは、今日の反対同盟の立脚点となっている。「闘争が一番楽しかった。おらの身は、おらの身であつておらの身でねえ、反対同盟さ身を預けた」というよねばあさんの闘争宣言。そして、宅地撤去攻撃に抗し、終始、家を、土地を、農業を守り、機動隊の暴行・弾圧に屈することなく闘い抜いたよねばあさんの闘い。そこにこそ北総台地、三里塚農民の生きてきた歴史と怒り、そして苦闘がはつきりと刻みこまれている。稲束を手に「オラの土地だ、帰れ」と叫び機動隊に身をていし対決したよねばあさんの闘い。それは農に生き、農を武器に闘つたということの重大性をはつきりと指し示した。空港反対の闘

いが単に北総台地・三里塚の闘いとどまらず、日本帝国主義との闘い、全人民の解放へ、戦争を阻止する闘いへと発展するに至つたその原点は、他ならぬ、このよねばあさんを始めとした反対同盟農民の揺ぎない実力決起にあつたことと言うまでもない。今、このことの意義の再確認が問われている。三派全学連が、六七年十一月三を契機に初めて三里塚に結集してから今年で十六年目になる。そして今大きな節目として八二年の闘いの重大性を問っている。

敵―日帝国家権力の三里塚闘争破壊、反対同盟解体の攻撃は、日増しに激化してきている。「話し合い」攻撃、また「成田用水」等を通じた同盟分断・解体の攻撃と、どれをとってみても一片の正当性もない攻撃が今、まさに打ち下されんとしている。「騒特法」および「土地利用計画案」に端的に表現されるように、これらの攻撃は「空港との共存共栄」なる美名をもってかけられてきている。そもそも空港建設そのものが全くの反人民的・暴力的なものに他ならないのに、空港との「共存共栄」などありうるはずもないのだ。そしてそれらの一切から「用地内」が除外されており、二期工事着工を前提とした「用地内」同盟の破壊が策動されているのだ。日本帝国主義の最大の狙いは、何よりも「用地内」反対同盟の破壊を通じた二期着工にあり、それによる三里塚闘争の解体、日本階級闘争の鎮圧にある。

「用地内」同盟は木の根の小川源氏の「おれについてこい」に表現されるように、この日帝の三里塚闘争破壊攻撃を一身に受けとめ、その対決を三里塚闘争の輝かしい未来をかけた勝利せんと敢然と戦闘宣言を發した。大木よねさんのように、「用地内」同盟のように、反対同盟のように闘おう。この決戦を反対同盟と共に闘おう。このことがわれわれのスピーカーガンなのだ。幾重ものフェンス、膨大な国家権力によって守られている日帝の侵略反革命の要塞を、人民の力で、人民の武装力で打ち砕こうではないか。今その時が刻一刻と近づいてきているのだ。文字通り、巨大な人民のうねりで空港を包囲し、空港の心臓部を破壊し、その機能と空港自体の存在を人民の闘いで、歴史のもくずの中へほうむり去ろうではないか。



目次

三里塚空港の反人民性を暴く	5
紆余曲折の位置決定	5
複雑な空の管制	7
三里塚空港は戦争攻撃の拠点だ	12
空港の命脈・燃料問題	16
恐るべき騒音地獄	18
農業破壊に貫かれた農振策	20
三里塚闘争16年のあゆみ	23
—写真と資料で見る闘いの歴史—	
反対同盟は闘う	50
北原鉦治 / 小川源 / 島村良助 / 小川嘉吉 / 笹川巳三夫 / 鈴木幸司 / 岩沢吉井 / 平山賢 / 渡辺義次 (敬称略)	
反戦の砦＝三里塚を防衛し、二期攻撃を粉碎せよ	56

三里塚空港の反人民性を暴く

紆余曲折の位置決定

農民無視・ 農業破壊の空港建設

ベトナム戦争が激化するにしたがって空港建設の必要性が日増しに強調されていった。軍事的には「三矢研究」で知られる通り、朝鮮半島を射呈に入れた侵略反革命戦争体制構築策動、つまり「有事体制」の研究が進み、経済的にも「朝鮮戦争」での特需を契機に帝

国主義としての「復活」をとげた日帝の高度経済成長政策をまづもって体現しなければならぬ緊迫性があったのである。朝鮮—アジアへの侵略反革命戦争に絶望的にのめり込まんとする日帝の軍事大国化に向けた死活動がはつきりとそこに見てとれる。

空港の位置決定には、一般的に言ってさまざまな条件が前提として浮かびあがってくる。交通体系の整備、燃料輸送の問題、空域管制、騒音その他周辺住民の生活補償等々である。三里塚空港の位置決定に関しては右のような条件は何ひとつ事前に十分に検討された

ものはない。というよりは、前述したように、首都圏軍事基地体制の強化、すなわち「有事」に向けた空港の再編としての三里塚空港の存在意義が何よりも優先し、既成事実の上に住民をなし崩し的に屈服させる日帝のお家芸によって無視されたと言つてよい。むしろこうした日帝の暴力的な再編こそ「新たな戦前」を唱える国家権力の本質的な攻撃として確認されなければならぬのである。

こうした日帝の思惑をはらみつつ、さまざまな案が提出された。時の自民党副総裁川島正治郎は、自分の選挙区(千葉一区)の土地性を生かして富里・八街案を出すそれに対し、当時の建設大臣河野一郎は莫大な利権を見越しての木

更津埋め立て案を出した。川島はそれではと、浦安の埋め立てで対抗した。埋め立て事業は莫大な利権がからむことで有名である。

その他、ロッキード被告橋本登美三郎は霞ヶ浦埋め立てを出した。こうした中で、六三年十二月、綾部運輸相からの諮問に航空審議会は、こう答申した。

「諸種の条件を総合すると、千葉県富里村附近が最も候補地として適当であり、また防衛庁との調整が可能であれば、霞ヶ浦周辺も適当な候補地であると言える。浦安沖は、主として航空管制上の見地から候補地として適当でない。」

浦安沖は、管制上の問題から当然のごとく消えた訳だが、河野が出した木更津案の件には一言も触れられていなかった。河野は猛然とこれに反対し、候補地は再検討を迫られる。この間も、実力者と運輸省との間で国会の答弁がくい違ったりするなど、権力者のさまざまな思惑をはらみつつ、候補地は二転、三転した。結局残ったのは、河野の木更津案と、川島の富里・八街案、橋本の霞ヶ浦案であった。このうち木更津案は、羽田の進入路の入口にあることから独自の管制空域が設けられるのは不

可能であり、河野自身が六五年七月死亡したこともあって消えていく。そして霞ヶ浦は、地元漁民の猛烈な反対にあい、自分の選挙区をこれ以上刺激してはまずいと思

ったのか消えていった。また、六五年七月から十一月にかけてのボーリング調査によっても不適とされ、富里案が浮かびあがっていったのである。六五年十一月十八日の閣議で内定され、規模は二千三百ヘクタールとなった。

富里の反対運動と三里塚決定

では、何故内定までしていた空港の位置決定が急に三里塚に変更になったのか。

当時、富里では反対運動の指導層が長老から青年層にかわり、激しさはいっそう増していった。富里は北総農業の中心である。スイカや野菜のメッカとして全国的にも知られているが、二千三百ヘクタールの敷地内の七〇%の農家が反対し、権力者はその交渉に困難の色をかくせなかった。運輸省、県当局の立ち退き交渉の条件として

全力を注いだのは、当時三里塚牧場と言われていた御料牧場と県有林の代替地だった。(約五百ヘクタール)

農民達は、「代替地があるならそこを中心空港を作ればいいではないか。」ということだった。

反対運動が激化する中、富里案がぐらついてきた最中でもあり、富里に近い三里塚に移すことは権力者に見れば当然の譲歩であった。また、公有林が多く、いわゆる戦前、戦後の開拓農家が多いということも、「土地にそれほど未練もなく切り崩しやすい」という日帝の農業政策の根本的な姿勢がそこにはあった。当時の高度経済成長政策の中で、農業従事者の工場への流出を促進し、小農を切り捨て、分断しながら総動員体制に組みこもうとする攻撃の一環としてあつたのだ。

そんなことから、時の首相佐藤栄作は千葉県知事友納に三里塚御料牧場案を提出した。六月二十二日、友納は補償条件は県の要求どおりとすることや、羽田を拡張し規模を縮小することなど、六項目の条件を提出し、了承をとった。(七月二日)

クタールに縮小された。空港の位置決定には、細部にわたっては二転、三転こそしたが結局、北総台地をのがれることはなかった。これは日帝の朝鮮「アジアへの侵略反革命を遂行するための巨大空港の建設の必要性が叫ばれ、どこにもひげをとらない大空港を拠点に軍事大國化をすすめる日帝のメルクマールになっていたことに大いに起因する。自衛隊百里基地と羽田の需要を総合的に一括し、軍事空港の建設に着手することは、砂川に四千メートル滑走路の建設を推進したにもかかわらず、もろくもその野望が崩れた日帝にとって死活的なものであった。しかし農民の土に生きる生活を根底からくつがえす空港建設は、おのずと農民の怒りを呼びおこし、新たな空港反対闘争、三里塚闘争を生み出した。戸村一作氏が委員長とする反対同盟は、政府側が説明会を開いた遠山中学校のその場で結成され、その後十七年間不屈にたたかっているのである。

複雑な空の管制

安保主導の空域設定

はじめに

一九六三年十二月、航空審議会は、富里、霞ヶ浦を候補地として答申した。しかし「地元の事情」ということで候補地は二転三転し一九六六年七月四日、閣議決定で三里塚に決定された。いずれにしても、新東京国際空港の候補地は北総台地から逃れなかった。その背景には、まさに航空管制上の問題、空域上の問題がある。

では、その位置決定の前提として空域分離方式―所要の空域が、それぞれ独立した本来の処理能力を発揮できるシステム―によって、設定されるとみられていた。しかし、実際、管制空域をめぐる運輸省と防衛庁との協議をみる限り、「空の縄張り」をめぐる激しい争いがみられる。関東空域を形づく

る横田、羽田、百里各空域で構成される現空域に割り込む形で成田空域が設定された際のさまざまな矛盾、諸問題はそうであるが故に何回もメスが入れたにもかかわらず、解決をみないどころか、極めて危険な状態を固定化したまま、開港に至っている。訓練空域をめぐる争いや飛行コースの二重、三重構造など背すじがぞつとする空のサーカス飛行の危険性を以下、明らかにする。

矛盾だらけの当初案

成田空港設置の決定にかかる空域案(以下当初案)は、新東京国際空港管制空域図として示されるものである(①図)

成田空域が設定される以前の、羽田、横田、百里各空域は、(2)、(3)図のとおりであるが、見てわかるとおり羽田空域を二分する形で、東側に設定されている。

a)まず第一に気付くことは横田米軍空域と、百里自衛隊空域には何ら変更がないことである。

関東空域の西部を構成する横田空域に関して言及してみると、米

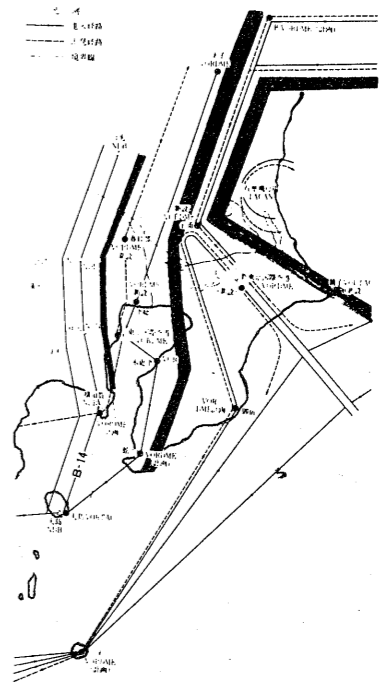
軍航空路ブルー14に沿って北から入間、横田、立川、厚木の四つの飛行場がある。これらは当時すでに一元化された集中進入管制(横田ラブコン)が行なわれている。

ベトナム戦争当時、羽田に米軍チャーター機が多く飛来していた事実は、こうした必然的な結果である。

関東空域の東部北側には百里空域が存在する。ここには、F-104丁、F-104E丁(第七航空団所属)や、RF-104E偵察ジェット機等がある。

百里基地は、緊急発進(スクランブル)する航空機による訓練、領侵犯対処等などの反革命的軍事任務を主としている。進入経路について述べれば、TACAN(UHF帯)の電波により、航空機に位置を知らせる無線施設)を用いた南からの進入経路が設定されている。これは、北には水戸、勝田などの市街地や、東海村原子力施設があるためであり、安全上、北からは進入しないということになっている。といっても、南からは北向きに滑走路を使用すると言っても、七〇パーセント程度であり、離陸に関しては、南向け、北向け共に百里基地を急上昇する戦闘機が多く存在する。

第1図 新東京国際空港管制空域図(当初案)



b) 第二に、土浦と平を結ぶ国際線の航路が一本しかない。風向きによって、その時々に出発便と到着便を使い分けるといふのであろうか、成田空域の外で、このように使い分けられた航路をスイッチする危険性は明白である。仮に高度差によって上下分離するとしても、風向き、機種、風速、温度等の条件によって、あらかじめコースの高度を設定することは不可能である。

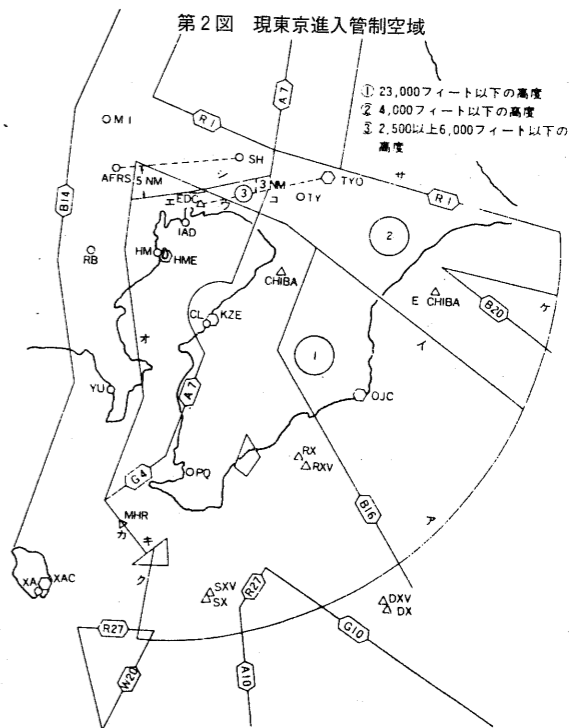
c) 航空法による空港の設置許可の前提条件である待機空域がない。羽田の待機経路については、北及

び東から接近する便は佐倉VOR(VHF無線施設—当時—)を用い、南および西からの便は御宿VORTAC(VORとTACとANが併置されたもの)を主として使っていた。当初案では御宿VOR(当時)を成田に受け渡すことになっていた。

成田開港後も、従来の処理能力を確保しなければならなかった羽田にあって、進入管制が十分に行えないとのクレームがついたのは当然の成り行きであった。

当初案は、こうした矛盾があからさまになるにつれ、再検討を迫

られることを余儀なくされたのである。



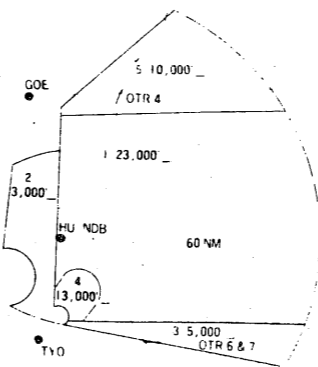
第2図 現東京進入管制空域

関東空域の再編

運輸省案

一九七一年九月、第二次代執行終了後、公団、航空局と、IATA(国際空港運送協会)との合会で、関東空域の再編案が協議され

第3図 現百里進入管制空域



た。その中で、航空局は、

(1) フェーズIステップI

三宅島VORDME(DMEはTACANの一種)が供用開始になるまで大島VORTACを用いて羽田と成田の飛行コースを設定

(2) フェーズIステップII

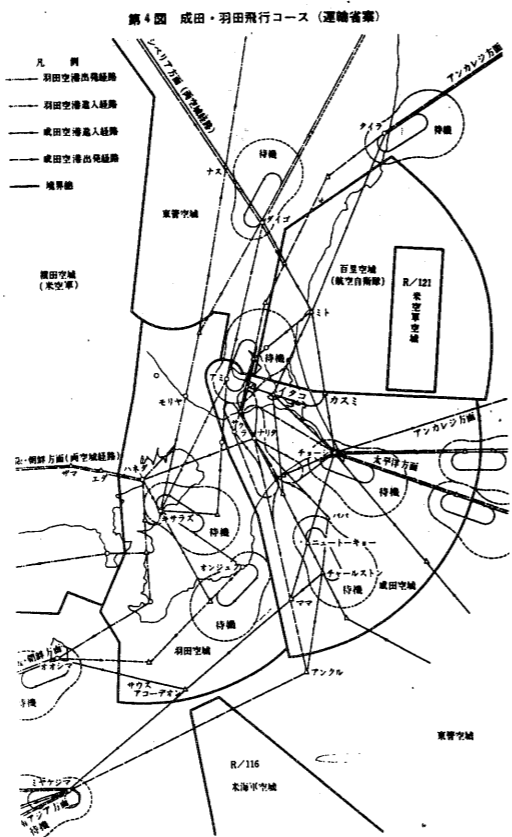
三宅島VORDMEが供用開始後、成田の飛行コースを三宅島VORDMEに移す。

という案を打ち出した。御宿の無線施設は羽田のフィックスとされ、当初案はこの時点で否定された。その見かえりとして銚子VORTACが浮かび上ってくる。

これは、利根川沿いに必然的に飛行コースが設けられることを意味し、百里空域が縮小され、上部が成田の飛行コースで削りとられることになる。百里飛行場—防衛庁からのクレームが当然のようについた。

成田開港が延び延びとなる中で、予定され、または計画されていた無線施設は目的、位置の変更を伴いながら次々と設置されていった。阿見、守谷、関宿、三宅島、いわき、横須賀、館山のVORDME、銚子、御宿のVORTACの設置である。(VORDMEは民間航空用、VORTACは軍用と併用)

第4図 成田・羽田飛行コース(運輸省案)



空域再編案の最終案が生まれたのは、こうした中であった。(4)

七二年当時、すでに作成されていたとされるその運輸省案をみると、平—土浦間の単線コースは、茨城県の太平洋沿いに進入コースを設け、回避されている。

これは、モスクワ便の問題に対処すると同時に、銚子VORTACを待機経路のフィックスとして使用し、そこから利根川沿いに北から進入するコースを設けることに

ては面白くない。それは、利根川沿いのコースによって上半分を切り取られるなら、スクランブル発進の頭をおさえることになり、内陸部上半分の削減は、TACAN進入を危くするのである。さらにニアミスの危険性が発する。

これは、羽田に進入する国内線到着機の待機空域として御宿VORTACが使用されているが、ここに待機している機と、大島VORTAC、三宅島VORDMEを経由して成田に進入する航空機との間の問題である。

物があるわけでなく、規制のみで拘束しているのに過ぎないのである。風向き、風速、機種、重量などの条件や、規制に対する感覚の異なる国々からの航空機を受け入れなければならない成田空港にあってこれは重大な問題である。

そしてさらに、羽田の待機空域と、成田の飛行コース、百里の訓練空域の三つが高度差のみで分離されている箇所が存在する。

詳しく述べれば、百里訓練空域の上に成田の北方便(モスクワ便と一部のアンカレッジ便)が通過し、その上を羽田へ北から進入す

る飛行機の待機空域が存在する。
 (阿見VOR DME)ということだ。
 ・阿見VOR DMEは、成田開港に伴い以前使用していた佐倉VORが使用できなくなったためである。高度差のみで分離される空域は、それぞれ三つの空域の進入管制が独立して行なわれるのである。

訓練空域の問題

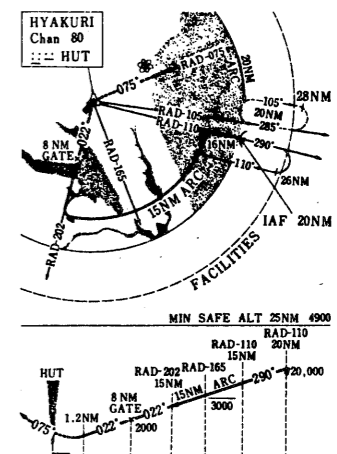
運輸省案による成田空域の新設は、百里空域の変更を大きく要求するものである。当初案のとき、百里空域の変更を不要とした経過からして、防衛庁との「争い」なしいは成立し得ないものであった。ここで、もう一度百里飛行場でのスクランブル発進、TACANの南からの進入について述べてみよう。

例えば、F-104型ジェット戦闘機は、発進後、一連の離陸操作を完了するまで、直進上昇を行なわざるを得ないようになってくる。この所要時間は約百秒、この間水平距離にして約六マイル、

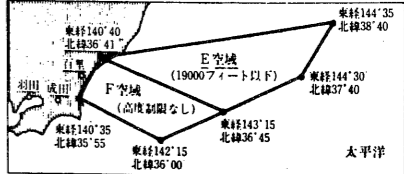
高度約六千フィートに達する。その後、南、北向け共に急上昇する訳である。内陸部上半分を成田の飛行コースで切りとられるなら、このスクランブル発進は、「お遊び」となってしまう。

また、TACAN進入については、(5)図のとおりであるが、鹿島灘沖の太平洋上において、TACANからの距離二十マイル(三十二km)で高度二万フィートの点からTACANを二百九十度の方向にみて直線進入降下を開始し、左急旋回してTACANから十五マイルのマークにのり、このマークに沿って徐々に右旋回しながらさ

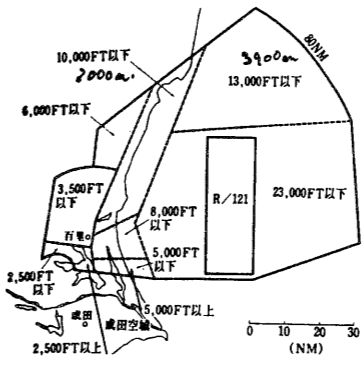
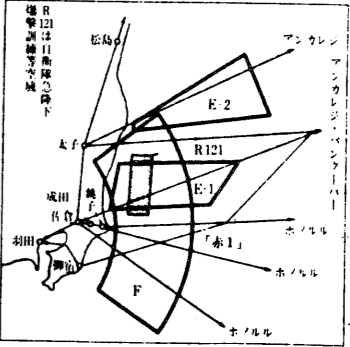
第5図 百里飛行場のTACAN進入経路



第6図 百里訓練空域 (防衛庁案47. 8. 10)



第7図 百里訓練空域 (運輸省案) (国際空港航路と交差している)



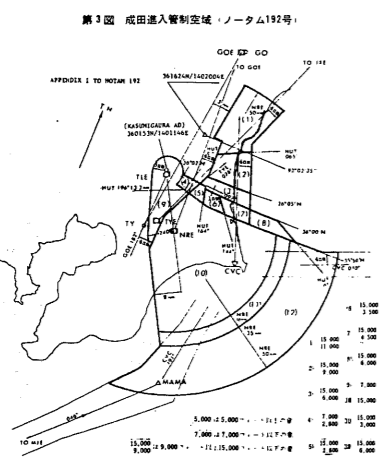
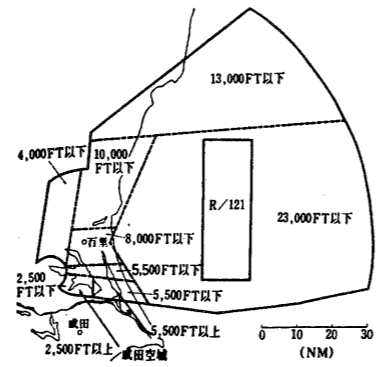
第8図 (運輸省案) 51・10・22 成田開港に伴う百里空域

唱ったが、成田と百里の場合、当初案の策定の経過からして、双方の協議は当然のこととされ、「空の縄張り」争いは激化することになる。七二年八月防衛庁案(6)図七三年運輸省案(7)図が、そういう中から出されたが、この運輸省案では、訓練空域内を七本の国際線が、斜断、くぐり抜けなどで通っており、また①高度差による危険性、②管制レーダーの画面の複雑化③民間航空路と、訓練空域の完全分離を定めた「航空安全緊急対策要綱」に違反する：等の指摘

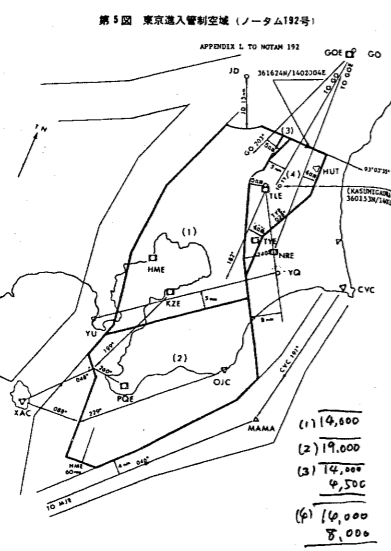
：がすでになされていた。さらに、七五年十月運輸省案(8)図七六年三月防衛庁案(9)図が出された。防衛庁案は、戦闘機訓練上の問題から運輸省案を批判したものである。こうした、さまざまな空域管制上の問題は、何回となく検討されたにもかかわらず、最後まで解決することなく、七十八年強行開港された。現在の空域はどのようになっているのであろうか、七十七年十二月三日、ノータム百九

十二号として表わされたものが最後の資料である。(10)、(11)、(12)図。これらを見る限りにおいては、依然問題は解決していない。成田空域に関しては、(9)、(10)空域を除いて全てトンネル空域であり、北からの進入便が通過するその下を、ジェット戦闘機がTACAN進入を行っている。危険極まりない成田空域は最後まで、その矛盾をさらけ出し、空の過密性は拡大されつつも、現在、騒音を響かせながら航空機は飛来しているのだ。

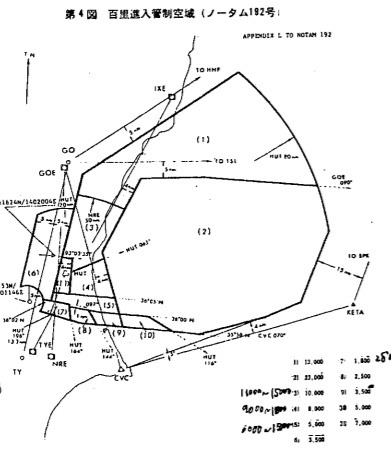
第9図 (防衛庁案) 52・3・3 成田開港に伴う百里空域



第10図 成田進入管制空域 (ノータム192号)



第11図 東京進入管制空域 (ノータム192号)



第12図 百里進入管制空域 (ノータム192号)

三里塚空港は戦争攻撃の拠点だ

「朝鮮有事」へ向けて 激化する二期攻撃

安保の下で「民間空港」
などありえない

張され、実行されていることだ。

戦時における民間諸施設の軍事利用が米軍によってのみ為されようとしているのではもちろんない。日帝・自衛隊にとっても、それを「スムーズ」に遂行することこそ有事体制研究の基軸となってきた。

「極東有事のさいには、日本側に輸送機関と国内の空港、港湾施設を使用する便宜供与を希望する。一九五〇年代の朝鮮戦争でも同じ供与を受けている」(ドネリー在日米軍司令官発言―昨年十一月)

簡単に言えば朝鮮侵略反革命戦争の遂行のためには、米軍は日本のあらゆる空港・港湾を攻撃基地として使用するということだ。しかもこれは「朝鮮有事」に限らず日米安保体制下の法的地位協定に基づいて歴史的にも現在のにも主

「朝鮮戦争」時、日本の
空港は攻撃基地になった

「朝鮮戦争」(一九五〇～五三年)においては、「民間空港」も含めて日本の諸施設はどういう役割を果たしたのか。

一言で言えば、日本・沖縄の全ゆる施設が朝鮮半島に向けた攻撃拠点となった。北海道から九州、そして沖縄まで含めた全域で米軍基地が全面始動しただけでなく、新たに多くの空軍基地が建設され、多数の民間空港が戦時用に改編された。日本が米軍に提供した軍事基地・施設は千二百八十にも達し、沖縄には二十五もの空軍基地が建

設されたのだ。

米空軍は戦闘爆撃機を北九州の板付、芦屋や島根県的美保基地に展開し、また重爆撃機を三沢、横田、入間、嘉手納などから朝鮮半島に向け出撃させ、朝鮮人民の頭上に、第二次大戦時を上回る空前の量の爆弾を投下したのだ。

朝鮮半島を戦場とする限り、日本の位置は、攻撃・補給・後方基地としての役割を果たす上で現在も何ひとつ変わってはいない。変わっているのは、「朝鮮戦争」の再現を、日帝・自衛隊自らがそれに直接加わり、主導しようとしていることにあるのだ。

三里塚空港はすでに 軍事利用されている

本年二月、東富士演習場で初の日米陸軍共同演習が行なわれた。

これに参加した部隊は、在日米陸軍のほか、米本土やハワイからも約五百名が加わっている。この部隊は私服姿で民間機であるといえ、三里塚空港を経由して東富士の米軍基地キャンプ・フジに入ったことが明らかになっているの

だ。

そもそも三里塚空港の建設の必要性が唱えられたのは、六〇年代米帝のベトナム侵略戦争の激化の中で羽田が、米軍チャーター機(民間航空機)で満杯になったことが大きな要因となっている。もっとも多いときには羽田の発着機の四六〇をこれらが占め数多くの米兵と軍事物資をベトナムに送りこんだのだ。

その他三里塚空港でもすでに明らかになっているだけでも、七九年東京サミット時において自衛隊機、米軍用機が離発着し、またリムパック⁸²に参加する米海兵隊が大挙して三里塚を利用している。

こうした事実こそ「民間空港」が「平時」においてさえ、重要な軍事的役割、侵略的意図の下に機能していることを完全に明らかにしているのだ。かかる意味において三里塚空港は軍事空港としての道を確実に歩みはじめている。

「朝鮮有事」を射星に入れた 二期攻撃と四空整

「朝鮮半島の軍事境界線にコン

パスを立てて、半径六〇〇kmの

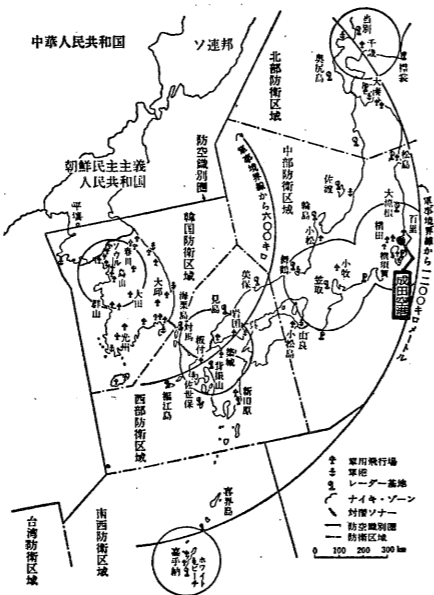
線を描いてみよう(地図参照)。それは西から佐世保、板付、築城、岩国の真上を通り、鳥取県中央部で日本海に抜ける。次に、一〇〇kmの線を描くと、沖縄本島北部から八丈島に至り、犬吠岬の近くを通り東北地方太平洋岸を経て、北海道千歳基地の真上を通過し日本海に抜ける。

(中略)ここで六〇〇kmという基準をとったのは、それが戦闘爆撃機の戦闘行動半径にあたるからだ。(中略)

一〇〇kmの位置にある戦略攻撃ラインからは、空中給油なしで戦略爆撃機、戦略輸送機が往復可能だ。(略)「(藤井治夫氏「戦争計画―自衛隊戦えば」)

三里塚空港も、資料1で明らかにように一〇〇kmラインの位置にある。こうした観点から、現在日帝が推し進めようとしている「第四次空港整備五カ年計画(四空整)」を見ると、それがまさしく「朝鮮有事」を想定した戦争体制構築の攻撃であることは火を見るよりも明らかだ。

三里塚の二期工事を強行し、日本海側を中心とする「地方空港のジェット化」などをめざした「四



資料1 朝鮮半島を弓状につつむ日本の軍事基地

空整」は朝鮮半島に向けた軍事空港網の建設計画に他ならないのだ。

軍事空港への転換をはら んだ空域問題

こうした日帝の目論みの中で、三里塚二期工事はいつたい如何なる意味を持つのか。

四千メートルを含む三本の滑走路を備えた三里塚空港が完成されれば、核搭載爆撃機B52の離発着が可能となり、それは横田、嘉手納に匹敵する巨大な軍事空港になることを意味するのだ。

しかもそればかりではない。関東空域を構成する成田空域、羽田空域、百里基地空域、横田基地空域(入間、横田、立川、厚木)という四つの空域における管制を一元化し、集中管制を行なわんとする目論みがあるのだ。それは言うまでもなく防衛庁の下の一元管制であり、「有事」における防空体制、侵略反革命戦争のための空域・空港の自衛隊管理をめざすものに他ならない。

もともと、前出の「新三矢研究」においても「航空管制も法(航空法)にしばられ、管制も一元的にコントロールできない。民間空港も緊急時に使えるよう戦時立法がある。」と露骨な要求を突きつけて

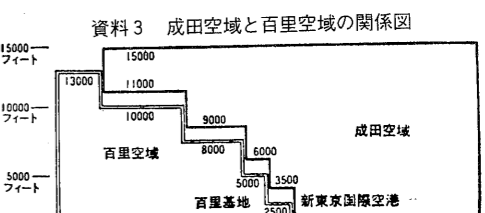
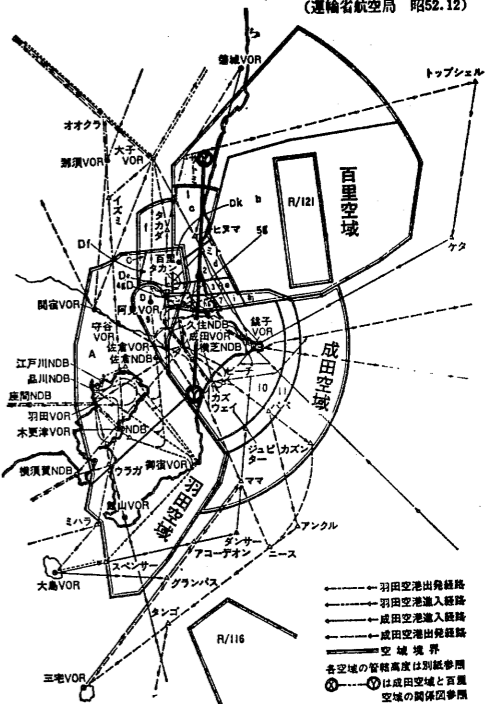
いたように、自衛隊による航空管制の一元化は、有事体制における不可欠の課題とされてきた。

かかる日帝の意図からすれば、空域をめぐる防衛庁と運輸省の間の協議の過程と、危険極まりない設定で出発した空域の現実（前出11頁）という問題の背景には、百里空域と成田空域の統合を射呈に入れた思惑があったに違いないのである。先に見たように百里基地は百里飛行場を緊急発進（スクランブル）する自衛隊機により、中部日本における防空、領空侵犯対処およびそのための訓練を主たる任務としている。現在、成田と百里の間にはホットラインがひかれており、相互に大きな制約をうけ、誰が考えてもその危険性は大きなのである。しかし、だからこそ逆に防衛庁による両空域の管制一元化は現実性を帯びており、それによって「危険な空域問題」は一挙に解決するばかりか「有事」における三里塚空港の本格的軍事空港への転換に不可欠の課題が実現されるのだ。そしてその場合、横田、羽田を含む関東四空域の集中管制が行なわれるであろうことは火を見るよりも明らかなのである。

空港建設は、他民族抑圧 侵略反革命の要だ

以上見てきたように三里塚空港が軍事空港としての機能と目的をもって建設されているのは、もはや明らかだが、それでは「平時」においてはどうなのか？結論から言えば「平時」「有事」を問わず現在の国際空港なるものは、本質的に他民族抑圧・侵略反革命の出撃拠点の役割を果たすものに他ならない。

資料2 暫定開港による成田空港関連空域 および成田・羽田飛行コース (運輸省航空局 昭52.12)



資料3 成田空域と百里空域の関係図 (注) 第21図における③-④間の横断断面の成田空域と百里空域の関係を示す。

公益性」の中身とはこのようなものでしかないのだ。

それは明らかに人民のための空港建設ではなかったし、むしろ日本帝国主義の他民族抑圧、侵略反革命（戦争）を体現する反階級的、反人民的存在なのである。



国家権力・機動隊の暴力 によって維持される治安 空港

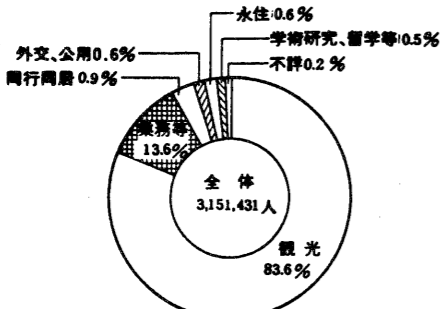
七八年五・二〇、強行開港された三里塚空港は、三里塚農民と全人民の怒りの中にある。日帝一公団は三里塚空港を守るためにありとあらゆる治安弾圧網を敷いているのだ。

毎日三千人の機動隊（空港警備隊）が空港周囲を取りまき、徘徊し、集会日前後には全国から約一万人の機動隊を動員して、わがもの顔に不当検問、暴行をはたらく。空港周辺十八キロにわたって高さ三メートルのフェンスが三重にはりめぐらされ、フェンスには電流の流れた電線が張ってある。地下には侵入防止を理由に数メートルの深さの鋼鉄板が埋めこまれている。まさに侵略反革命の拠点にふさわしい治安空港そのものなのである。できればかりではない。日帝一公団は不屈に闘い抜いている三里塚農民叩き出しのためにありとあらゆる攻撃を加えている。すさまじい騒音地獄をつくり出して、怒り、対同盟農民は日帝一公団に対する「騒特法」で人間の叩き出しをね

資料4 目的地別海外渡航者数 (1977年)

渡航目的地	実数(人)	構成比(%)	対前年比(%)
総数	3,151,431	100.0	10.5
アジア	1,715,376	54.4	12.7
(うち)アジア	1,689,144	53.6	12.3
韓国	447,519	14.2	10.9
中国	23,445	0.8	24.5
(台湾)	482,832	15.3	11.2
香港	366,319	11.6	5.3
インドネシア	42,794	1.4	11.6
シンガポール	63,055	2.0	43.0
フィリピン	145,689	4.6	33.3
タイ	79,090	2.5	6.9
マレーシア	11,822	0.4	8.0
その他	13,346	0.4	27.8
近東	13,233	0.4	11.6
イスラエル	26,232	0.8	39.3
その他	7,878	0.3	41.6
ヨーロッパ	1,082	0.0	4.8
その他	17,272	0.5	41.2
北アメリカ	337,155	10.7	6.6
南アメリカ	1,025,237	32.6	8.5
オセアニア	21,824	0.6	8.3
アフリカ	30,856	1.0	18.5
その他	15,761	0.5	24.1
その他	5,222	0.2	-50.1

資料5 目的地別出国日本人構成比率



(注) 法務省「出入国管理統計年報」による。

六年間闘い抜いているのだ。反対同盟の闘いを支え抜き、何として二期阻止、空港廃港を実現しようではないか。

空港の命脈・燃料問題

危険な燃料輸送

貨車輸送の問題

七一年「六月開港」の叫び声が破産したなかで公団は重大な失策を燃料輸送に關してもおこしていた。パイプラインの完成が沿線住民の工事差し止め訴訟によって急遽貨車で運ぶことになったのだ。当初「貨車輸送は危険だからパイプラインを建設する」と公団自身言っていたのに。

ト燃料列車の事故は公団の主張がまったくのたためであることを見明らかになっている。(例六七年の新宿駅の貨車爆発事故は延々数時間も燃えつづけた)

この危険な貨車輸送を鹿島港から鹿島臨海鉄道を経て成田へ運ぶ鹿島ルート。千葉港から京葉臨海鉄道を経て成田へ運ぶ千葉ルート。二本で一日約四千キロリットの燃料を運んでいる。国鉄は、貨車輸送に伴う安全対策というこゝとていくつかを示した。だがその内容たるや、ロングレールの使用、カーブの改良、踏切の自動化、貨車の改良等ではない。これらの対策が安全を保証したものでは全くないことは、動労千葉の指摘によっても明らかである。

千葉鉄道管理局内の線路状況は最悪でありいつ脱線事故があつて

もおかしくないほどののだ。ここ数年でも脱線事故が相次ぎ、成田線ではタンク車が脱線、破損、中の可燃ソダが大量に流出するという事故が発生している。これは二つの意味において重大なことを示している。一つには、線路状態の劣悪化である。国鉄の合理化は保線部門にも及び、保線の下請け化と機械化をもたらし、その結果線路は極端に荒廃し、いつ脱線事故が起きてもおかしくないという状態で燃料が運ばれていることになっている。補足だが二つの臨海鉄道は更に危険であり事故の報告もある。もう一つの点は、貨車の横腹が破れて苛性ソダが流出したということである。国鉄は「取り出し口、取り入れ口を転倒しても油の漏れない貨車にする」から安全だと言っているのが、タ

トが住民の反対で折ると、安全性を無視して工事にもない、使われた凝固剤によって地下水が汚染されたり、水が枯れたりする事件が相次いだ。住民はただちに工事の中止と、水質調査を依頼した。県の調査によると、たちまちシロと出て公団は直ちに工事を再開したのである。しかし住民が独自に調査を依頼した和光大の生越教授によると、使用協定で使ってはならない凝固剤の成分が検出され、このことは明らかに、県と公団が一体となって住民をだましたものだ。

パイプライン

パイプラインが全線接合したことをもって政府・公団は、いよいよ

よ二期工事の状況が整ったようになっている。しかし我々が指摘しておかなければならないのはパイプラインは決して安全なものではなくむしろ空港のアキレス腱であると言いたい。そもそもパイプラインは砂漠の中で原油を輸送するため通したものであり、人口の密集する都市部を延々四十キロも通すなどというのは世界にも例がないのである。にもかかわらず公団はパイプラインの安全性は十分に保証されているとウソぶいている。

七一年八月十九日、公団は、パイプラインのルートを発表。それによると千葉港より埋め立て地を経て東関東自動車道を通って空港に至るとされた。

パイプラインが通るとされたところには、幸町団地、稲毛海岸公務員住宅、朝日ヶ丘、小仲台第二などの団地があり、一斉に反対の声があがり、工事差し止めを求めるマンモス訴訟もおこされた。

公団は、開港をあせり、市道(水道道路)部分から埋設を開始したが、住民は監査請求をおこし対立した。結局市道の占有許可(パイプの)期限は切れ工事は中止、パイプラインは放置された。(後に撤去)

ここに於いてパイプラインは完

全に破産し暫定貨車輸送に変更となるわけだが、ここでパイプライン自体の安全論争を見てみよう。

パイプラインの技術的問題

まずパイプ自体の強度であるが公団は内圧のみを基準にしていることである。地下埋設されるパイプラインは外的な力を計算して安全が立証されるべきであるが、そのことに全くふれられていないのである。パイプラインは埋め立て地より花見川の軟弱な河底を通って東関東に至る新ルートが発表され現在工事中である。このルートには有数の地盤沈下地帯で地盤の沈下によってパイプが損壊する危険は十二分にあるのだ。

また地震等の災害に対して漏油を断つ、緊急シャ断弁、それを制御するコンピュータの信頼性も決して十分でないことは専門家も指摘している。

更に運ばれる油は、前項で指摘した通り危険なジェット燃料であり、沿線一帯が火の海と化する危険は、いよいよ来年の供用開始をもって始まるのだ。

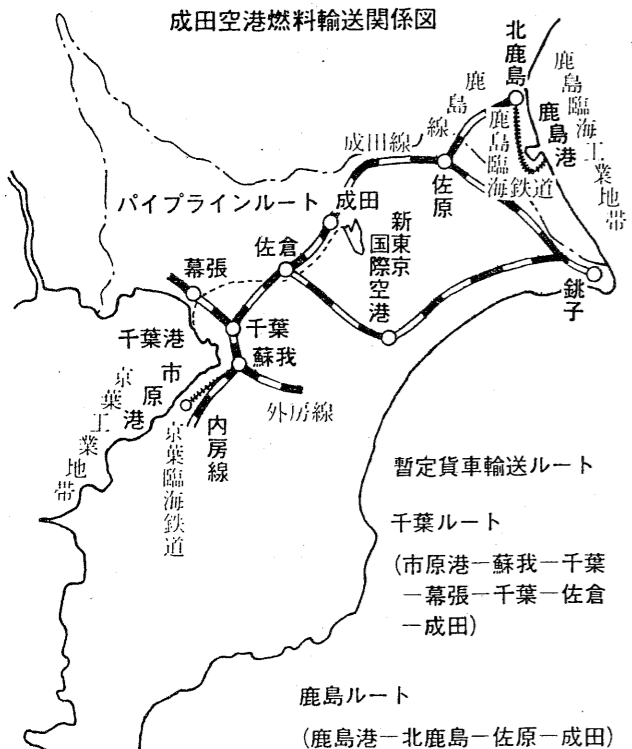
パイプラインの建設は、「開港」を左右してきたし、二期への重要な布石となっている。最後にパイプライン工事の諸問

題についてふれてみよう。

工事は、完成を急ぐあまり昼夜兼行の突貫工事でおこなわれ、職場環境は最悪であるとの報告が沖繩出身労働者から寄せられている。そこにおいては、公団の言う「安全には万全を期している」というのが全くのたためであり、実際には死亡事故も報告されている。花見川河底の工事は、難工事を極め、暫定輸送の一年半の延長という事態となったのだ。が、そもそも花見川はパイプラインには適さない(安全性の面で)と言っているのは公団自身であり、他のル

トが住民の反対で折ると、安全性を無視して工事にもない、使われた凝固剤によって地下水が汚染されたり、水が枯れたりする事件が相次いだ。住民はただちに工事の中止と、水質調査を依頼した。県の調査によると、たちまちシロと出て公団は直ちに工事を再開したのである。しかし住民が独自に調査を依頼した和光大の生越教授によると、使用協定で使ってはならない凝固剤の成分が検出され、このことは明らかに、県と公団が一体となって住民をだましたものだ。

成田空港燃料輸送関係図



農業破壊に貫かれた農振策

同盟分断を狙う成田用水

(四〇パーセント以上)が芝山町の騒音地帯にあってられている。幹線、支線は野毛平—芝山第一、第二工業団地を結んでいる。また受益地帯は芝山北部、南部が全体の半分を占めている。

日帝の策略を粉碎し、断固たたかう反対同盟に連帯せよ

五月二十日付朝日新聞紙上で、公団総裁中村大造は「二期工事前提としないで、ハダカで話し合おう」などと、露骨な「話し合い」攻撃の公然化を示してきている。その宣言どおり、日帝—政府—公団は土地強奪—自主耕作に対する恫喝—破壊攻撃や、一坪用地買収策動、西村明構想による条件派組織づくり等と一体となった形で成田用水の事業を菱田地区にもりこもうと必死になつてゐる。

その攻撃の露骨、破廉恥さは目をおおうばかりである。日帝—政府公団の狙いはただ一つ空港との共存を前提として農民に農業の振興の幻想を抱かせ、反対同盟の中に「用水賛成派」を組織することによって同盟内に分断をもちこむものである。

農民のかんがい施設に対する長

い間の悩みにつけ込んだ悪らつ極りない攻撃として、断固粉碎しなければならぬ。

この間、菱田青年行動隊の力強い声明文にもあるように、反対同盟はこの攻撃を断固粉碎するたかいを展開している。不屈の同盟の意志に何としても応え、二期阻止、廃港をかちとろうではないか。

成田用水とは

成田用水事業は、六十六年七月四日閣議決定と共に、周辺騒音地区に対する見返り事業として計画され、七三年施行されている。

概要書によれば「利根川より取

水して新空港周辺地域内の農地二四六一ヘクタール(畑一三三八ヘクタール、水田一三三三ヘクタール)に対し畑地かんがい及び用水供給を行ない、従来の主穀中心型の営農型態を、そ菜果樹中心型の近郊営農型態にかえ、農業経営の安定と合理化を図るものである」となつてゐる。

強行開港に伴い、七十八年十一月、騒音法が施行された。B滑走路予定地直下にある菱田地区に対しても、適用された。これは病院や学校等の新築、改築、家屋のそれも認めず、しかも移転を促進するというものである。文字通り廃村攻撃を、しかけてきたのだ。こうした一方で、七十八年十二月一日、運輸省は「空港周辺農業振興策」なるものをうちだし、騒音法で廃村攻撃をかける一方で、菱田地区農民に用水事業をもちかけてきたのである。

- ① 水資源公団管—基幹施設、ポンプ場、調整池、幹線水路
 - ② 県管—支線水路、ほ場整備、農道、畑地かんがい
 - ③ 団体管—支線水路、暗きょ排水畑地かんがい
- 図をみれば受益地の大部分が

成田用水そのものが、農業の振興の為ではなく、騒音対策のみかえりとしてうちだされたものである。農民たたき出しの一環となされてゐることは、このことだ

けでも明らかである。

七十九年八十と、反対同盟はこの攻撃を粉碎し、辺田部落などでは、部落集会以「凍結」を決議するなど、勇然とこの攻撃をはねかえしている。

だがしかし、公団は、迫りくる二期へのあせりを露骨にうち出している。「財特法の期限が迫っている。もう話し合ふ余地はない」などと、部落内に強引にはいり込み礼束で賛成派を組織せんとしたり、「用水賛成」の署名を集めま

わつたりしてゐるのだ。

われわれは、このような攻撃を断じて許さず、反対同盟と共にたたかわなければならぬ。

成田用水は「農業振興」のためではない

そもそも成田用水は、「農業振興」というものではなく、騒音対

策のみかえりであることはさきにも述べた。また、それは行革から特別扱いされた成田財特法から二十五名の補助金が出ていることからもわかる。「金を出して工事をしてやるから騒音をがまんしろ」と言つてゐるのだ。空港の既成事実化をこのように行なうベテensexを断固粉碎しなければならぬ。

また、工事そのものはきわめて

せてスライドする。そして、転作、減反を促進し、農業そのものの維持を不可能にさせ、小農家のたたき出し、農民同士の対立、分断を生み出させるのだ。

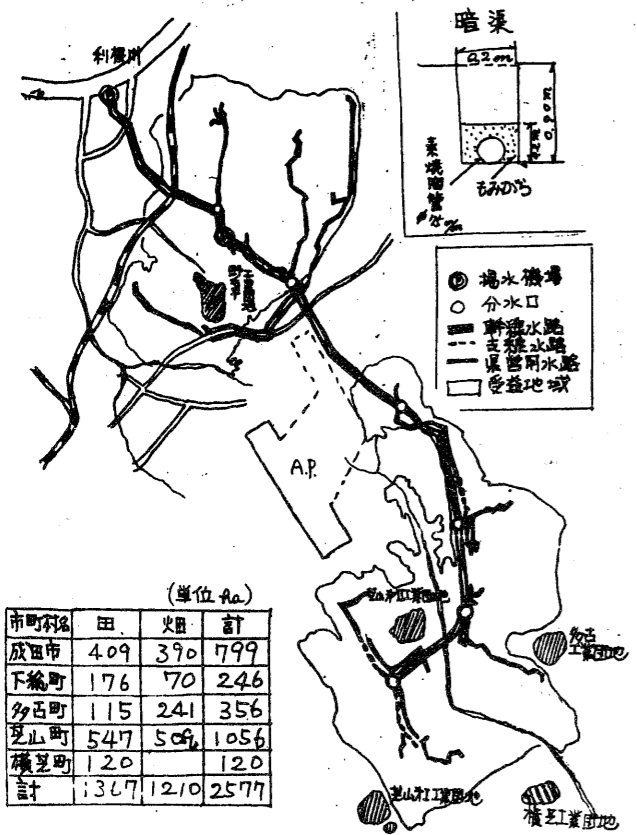
最後には「成田用水地域営農基本計画」の名の下に、「ニュータウン、内陸工業空港関連企業等の進出」にそなえて、「都市近郊型農業へと体質改善する一方、土地の供給も行う」という、いわば地強奪の条件づくりであり、成田用水はそのまま工業用水として使用されるのだ。

公団は「水の恩恵を与えてやる」とばかりにいつつ反面では騒音法によってたたき出し、空港中心型の騒音型工場を建設し、その工業用水として使う計画なのである。

県営事業の中に農道の整備が唱われてゐるが、用水パイプが何本かうめられる上には、幅六メートルの道路が作られることになつてゐる。しかし六メートルは農道としては広すぎ(大型トラックがすれ違ふ)る。

受益地域の一部、多古ではこの道路を「産業道路」と呼んでゐる。用業用地のための道路であることは明らかである。

成田用水関連図



農業破壊に買かれた 成田用水を粉砕せよ

水路などの整備のため五ノ十パーセントの農地が減る。

同盟に断呼連帯し、成田用水攻撃を粉砕せよ！

(1) 受益者負担の問題

一般事業と比べると受益者負担がずいぶん軽いというが、実際は

① 公団幹線……二二七三円

② 県営支線……五二七円

③ ほ場整備……七二九〇円

④ 用水施設……一一〇三円

の合計で一―二九三円となる。①②③④

として「成田用水事業が完成するまでに物価のいちじるしい変動その他重大な事情の変動がある場合には負担金額等を変更することがある」(成田用水土地改良区の定款)とされており、物価にあわせてスライドされるのだ。さらに土地改良区の賦課金(用水施設の新築改築についての災害復旧工事に要する費用等)が上のせされる。このように見ていくと負担は決して軽くはない。

(2) 増収の幻想
農業収入の増大という唱い文句があるが、

① 減歩、減歩とって農道、排

「主穀中心型の営農型態を……都市近こり営農型態に変え……」と転作を強要してくる。現にほ場整備事業の実施には二十五パーセントの転作率の強制という条件がある。転作によって多くの農家が畑作物を作るようになれば価格は暴落する。増収どころか、逆に農民を追いつめる形でしか成立しないのである。

「用地内」同盟をないが
しろにする用水攻撃を
粉砕せよ

日帝政府、公団は、それゆえこの成田用水攻撃に並なみならぬ決意を秘めており、反対同盟に襲いかからんとしているのだ。また成田用水は、周辺の騒音特別区域への事業を目的としている性格上、「用地内」同盟の存在を否定するものである。現在、十五戸の反対同盟が健在であり最先頭で闘争をたたかっているのだ、人間ようさい、徹底抗戦で武装する「用地内」

三里塚闘争16年のあゆみ

写真と資料で見る闘いの歴史

北総台地・三里塚の怒りと闘い

66

66年7月4日閣議決定 この大罪を許すな

昭和41年(1966年)7月4日 月曜日 2891

「三里塚空港」を閣議決定

45年に滑走路一本完成

将来、都心と30分で結ぶ

閣議決定は、三里塚空港建設の閣議決定は、三里塚地区に、新国際空港を建設するに当たり、三里塚地区の住民の生活と健康に重大な被害を及ぼすおそれがあるとして、閣議決定した。閣議決定は、三里塚地区の住民の生活と健康に重大な被害を及ぼすおそれがあるとして、閣議決定した。

空港反対の決意かため

反対同盟結成さる

われわれは三里塚が反対が少なくないという政府の一方的判断に対し、本大会の事実をもって絶対反対が大多数あることを表明すると同時に、地元民に他に考える余裕も与えず最初から反対の意見を押し殺す態度で、閣議決定を急いで強行する暴挙に対し、政府並びに県当局に本大会の名において強く抗議するものである。(中略)

われわれ地元民は、政府・県・市当局の無暴力やり方に憤激し、直ちに部落ごとに協議し、新空港設置を三里塚に許さないため、急ぎよして反対同盟を作り、富里はじめ関係周辺市町村や、すべての新国際空港反対支援団体に協力を求めて、ここに総決起大会を開催した。

反対同盟結成宣言

六月二日、佐藤政府は突如として新国際空港三里塚提案を発表した。これは富里・八街・山武の強固な反対運動で完全に追いつめられた政府が窮よ

国策なら農民を殺してもよいのか

7・4閣議決定に対し県庁前旧自治会館で決起集会。その後県庁包囲県議会決議阻止へ。



空港はいらない

6月28日成田市立遠山中で開催された三里塚新国際空港反対総決起大会。三里塚空港建設の決定いかんを問わず、地元農民は絶対に空港を建設させない。強行すれば血なまぐさい流血の惨事がひきおこるであろう……自由のたたかいのため最後まで闘いぬく決意である。——(抗議声明より抜粋)



政府の北総台地にあくまで新空港を強行設置しようとする新たな策謀に対しあくまでこれを阻止し、農業を守り、住民の生活を守り、郷土の平和を守るため新たなたたかいのろしを上げた。本大会に参加したすべての支援共闘団体は、現地農民のたたかいを断固支持し、さらに広汎な全県、全国のたたかいに発展させるであろう。

われわれは、富里空港反対運動の教訓から学んでそのたたかいの継続として、強力な体制をここに確立した。

政府が新空港設置をあくまで強行するならば、いかなる事態が起きようとも、富里のたたかいと同じように、自ら窮地に追い込められ、墓穴を掘ることになることをここに警告する。

われわれは自民党政府並びに県当局が反対運動に屈し、三里塚空港設置を撤回し、また放棄せざるをえない日までに断固たたかい抜くことを本大会の名において宣言する。

昭和四一年六月二八日
三里塚新国際空港反対総決起大会



運輸相を成田駅で実力包囲、駅舎にかんづめ。

67年6・26大橋運輸相来成阻止闘争

実力闘争へ—三派全学連結集

67
68

流血の実力闘争

- 67年6月26日 大橋運輸相来成阻止闘争に決起。反対同盟一千名、機動隊を撃破し京成成田駅を占拠。
- 8月15日 少年行動隊結成。
- 9月25日 老人行動隊結成。
- 10月10日 強制外郭測量阻止闘争に決起。反対同盟千五百名、機動隊と激突。不当逮捕者一名、重軽傷者多数。
- 11月3日 全学連初めて三里塚闘争に結集。
- 12月15日 反対同盟日共排除を決定。
- 68年2月26日 三里塚空港実力粉碎、砂川基地拡張阻止2・26現地総決起集会が開催され、成田市営グラウンドに三千五百余名結集。公団実力封鎖を闘う。被逮捕者十六名。
- 3月10日 公団実力封鎖に一万人が決起。公団に肉迫し、流血の実力闘争を展開。被逮捕者一九八名、重軽傷者多数。
- 3月31日 三派全学連、反対同盟とともに公団構内に突入。

開始された大地の闘い



公団無用・公団撃退

むしろ旗を押し立て、三里塚一帯を五千名でデモ(7・10)

闘いのあゆみ

- 66年6月28日 成田市立遠山中学校に千五百名を集め、三里塚空港反対同盟が結成される。委員長には戸村一作氏が満場の拍手で選出。
- 6月30日 芝山空港反対同盟が結成される。
- 7月4日 運命の日—閣議決定に抗し、反対同盟は闘いに決起。運輸省、千葉県庁、成田市役所と部隊を編成。県庁前で座りこみ機動隊と対決。成田市議会で「空港反対決議」をかちとる。
- 7月10日 「新空港閣議決定粉碎総決起大会」が三里塚第二公園に五〇〇〇名を集め開催される。この時三里塚芝山連合空港反対同盟結成される。(委員長戸村一作氏)
- 10月2日 「三里塚空港撤回、公団撃退総決起集会」成田市営グラウンドで開催。五千名決起。
- 12月15日 天神峰現地闘争本部建設。
- 67年2月26日 駒井野団結小屋建設。
- 4月27日 木の根団結小屋建設。

現地闘争本部を新設

芝山・連合空港反対同盟

三里塚・芝山連合新設空港反対同盟は、成田天神峰の石橋駅。本会本部は三里塚第一公園にあり、十五日午後三時の空港反対同盟本部で、完成次第三人が警備し、反対同盟本部の本部となる。

おらあ、

正しいことやってるんだ

10・10でよ、それまで機動隊なんていったって見たことなかったべえ。どんなものだと思っただよな。あ。鬼みてえでよ、人ぶつくらかして、しよつびいていくもんだと思っただよな。——
だからよ、前の日のクイ打ちのときはよ、二千人も来たって聞いてよ、おらふるえていただよ。
うん——だけどな、おらもうこわかねえな。正しいことやってるんだってえ考げえもつてればな、なんだってこわかねえよ。——
おら必死だったよ。真黒になって機動隊が並んでよ、高いところへ乗った指揮者がさらさらこつちへ来るときの気持ちつたら、なんだろうか、おらあ手榴弾でもあつたら投げつけてやりたかったよ。
結局、ぶつかつたのは同盟だけだよ。——それから民青や共産党は悪いこと始めたよ。反対同盟をたたかわないで自分のものにすべえと思つてて。

おらあ、一年越しに、こんなやつらとは、闘わなきゃなんねえと思つてきたよ。
——本当にやつらは、なんていうだろうか、きたねえよ——

(「闘いに生きる」柳川のお母」発言より抜粋)

声明書

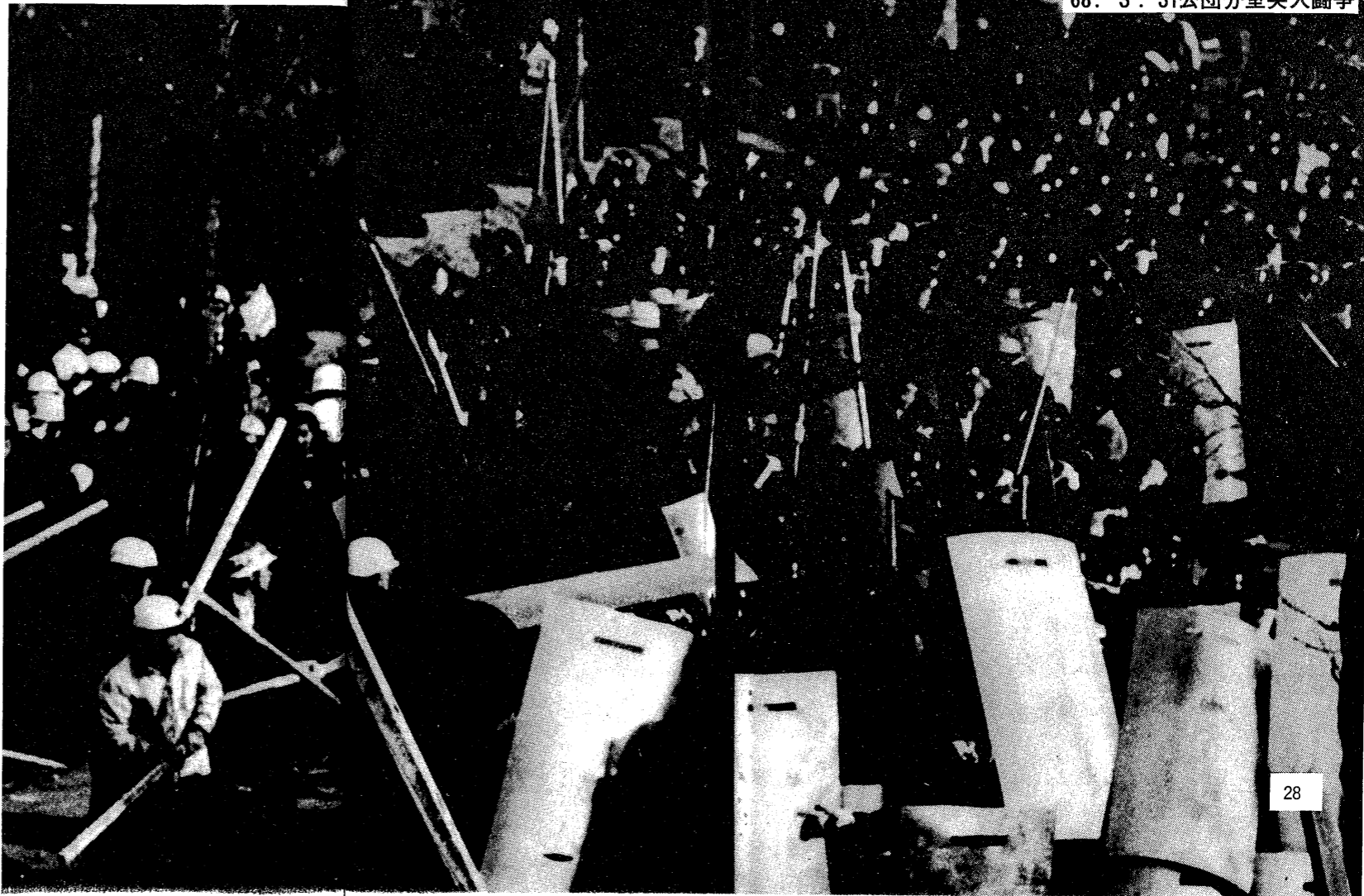
我が三里塚芝山連合空港反対同盟は昭和四十一年七月政府が住民意志を無視して新国際空港設置を決定し強行したことに始まる。

連合反対同盟の目的は住民が空港反対の意志を集めて、全国の民主的勢力を糾合し大同団結のもとに政府の暴挙である新国際空港を粉砕し農地と生活を守り強いては、新空港の基地化を防ぎ日本の平和を守るためである。以来六カ月に亘り私達はその目的のために寝食を忘れて闘つて来た。

六月二十六日前運輸大臣の来成、十月十日の強制立入調査または十月下旬の第六標点における杭の復元工事と何れも強大な警察権力を相手として闘い、三名の逮捕者と九名の負傷者を出しながらも政府公団が公然とは一歩も現地に入ることを許さないのは、同盟員の皆さんの勇猛果敢な行動と全国的による民主勢力の支援の賜であります。

現在、現地には我々の正しい反対運動を理解しこれに協力しようとする革新政党的諸団体、各種労働組合、進歩的學生と数多くの全国の仲間がオルグとして、時には援農、またビケ要員として入り、おられます。そして、それぞれが各任務をもち、部所、分担任に従って支援を続けております。我々はこの支援団体を何んのために支援を要請し現地に入っているのか？それは明らかであります。敵、即ち空港を設置しようとする政府公団が国際独占資本と

68. 3. 31公団分室突入闘争



手を握り、余りにも強大な力を以って我々を弾圧し、空港を強行しようとするからであります。これを押しかえし空港粉砕のためには、我々自身の力を余す処なく發揮すると共に全国的規模のもとに民主勢力を結集しなければならぬからであります。
言葉を変えて言うならば、強大な国家権力に抗し空港粉砕するためには妙薬もなければ特効薬もありません。そのために支援を受けられている訳です。然し我々は、この支援団体を無条件に受け入れて、その行動を容認しているわけではありません。空港粉砕の目的を實現するために、地域住民によって構成されている反対同盟の自主性を尊重し、その統制にふくし、同盟の団結を強固にし更にその戦力を増大する限りにおいて民主勢力の支援を許さるべきであります。

処が日本共産党は十一月三日の三里塚集会以來連合反対同盟に対して、その方針の変更を強要するとか、更に十一月十四日朝日新聞の仲介によって連合反対同盟の戸村委員長、瀬利、石橋、副委員長が幹部が運輸大臣に会談を申し入れたとか、事実をまげて喧伝し、また「同盟幹部が条件派に成った」とか「富里村二重堀に同盟幹部二人が四町八反の土地を購入した」とか事実無根な事を言いふらして一連の反幹部工作を繰返しております。
このまま放置したならば、組織は破壊されやがて戦力を失う危険があります。
彼等は何んのためにこのような反幹部工作をするのでありましょうか。

その意図は明らかです。

A同盟幹部を意識的に中傷することによって幹部と同盟員の引きはなし組織を動揺させる目的であります。

Bそして組織の動揺に乗じて一挙に現幹部の責任を問い、退陣を求めて同盟の主導権を握ろうとするものです。

C更にそのようにして来二月芝山町議選において、共産党のせんに乗った同盟員の票を共産党の公認候補に結びつける意図があるのです。

およそ政党は、政策を通じて国民に貢献すると共に空港の具体的な闘争に当っては、団結を守り反対運動の戦力にプラスするよう支援体制を作らなければならぬのであります。
これに反し、反幹部闘争、組織の分裂を来すような行動をする政党は我々にとって、政府公団と同様であり、如何なる政党と雖も、これを排除しなければならぬ。

今回の日本共産党の反幹部攻撃、組織破壊工作は同盟の勝利のための生命である団結を阻害するものである。よって今後共産党がこのような態度を改めない限り、支援並びに一切の介入は断固として排除するものである。
右声明します。
昭和四十二年十二月十五日

三里塚芝山連合空港反対同盟

全国を揺がした家族ぐるみの闘い 69/70

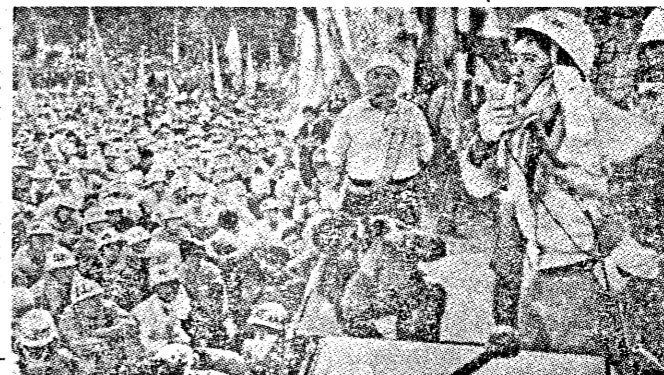
●闘いの発展に、「計画」の大幅な遅れを余儀なくされた政府・公団は必死のまき返しをはかり、まず国有地である御料牧場や県有林からなし崩し的に着手して既成事実をつくり、そして他方で土地収用法による土地の暴力的強奪へと本格的に動き出した。それに対して反対同盟は、日共との訣別後、ますます実力闘争路線を鮮明にして次々と全力で対決していった。



●69年8月18日、空港用地内で膨大な面積を占める宮内庁御料牧場の閉場式に対して、反対同盟二百名は会場に突入、壇上を占拠するなどしてこれを完全に粉砕し尽した。この日の闘いを口実に八名が逮捕、萩原青行隊長ら二名が全国指名手配となる。

萩原青行隊長の発言(69・9・28)

(略) われわれはこのような弾圧の中で、今こそ、本心に、たたかうのか、あるいは、敵の攻撃の前に屈するのか—革命が反革命かの激動期を作らなければならないだろう。自分は今、全国指名手配という権力の暴挙の中において、若者に考えることは、このような権力の集中攻撃をあびることに非常な誇りをもつ。そして、このように三里塚闘争を戦闘的にたたかえることは非常なる幸福である。現在の権力の中に、そしてたたかいは展開する中で、弾圧が加えられないようなたたかいは決して存在しない。弾圧が加えられておる社会は人民の社会ではないはずだ。この弾圧をはねのけてこそ、粉砕し



●「事業認定粉砕全国集会」に1万3千名の大結集。全国指名手配中の萩原青行隊長が弾圧をかいぐり登壇し、劇的な決意表明を行なった。

三次にわたる測量阻止闘争

●そして70年、建設省の認可をうけた「事業認定」をもって公団は、強制収用のための強制測量の開始へと踏みきった。反対同盟は、木の根・天浪・駒井野の各団結小屋にバリケードを構築、1月25日から五百日間の座りこみ闘争を開始して測量阻止に備え、三次にわたる強制測量に対して毎回一千名以上の大部隊で公団・機動隊を撃退し続けた。反対同盟はこれらの闘いで初めて少年行動隊の同盟休校を敢行、文字通りの家族ぐるみの闘いを展開した。ここに三里塚闘争は全人民にあらたな衝撃を与え、深い感動を呼びおこした。

同盟休校に関する宣言

空港反対同盟(70・2・16)

(略) 三里塚、芝山の農民、住民にとっても現在もっとも良くたたかうことにおいてこそ、真に、未来の子孫を育成するいしづえになるのだということを確認して、ここに同盟休校に突入することを宣言します。(略)

反対同盟の学校長あて同盟休校に関する文書

(70・6・11)

(略) われわれは、正しい事をどこまでも貫く。十二日の「公開審理」の強行に際して、わが同盟は四年にわたる闘いの経験に学び、総力動員でこれにとりくむものである。先般来、一部意識的報道として「批判」の声をあげる少年・少女行動隊の「同盟休校」による闘いも、われわれの不拔の信念に基くものである。(略) 今日の社会のどこに法が守られるのか、われわれは自信をもって子供にこれを見せたい。自分の信念と行動を子に見せて恥辱とする親にわれわれはならない。(略)



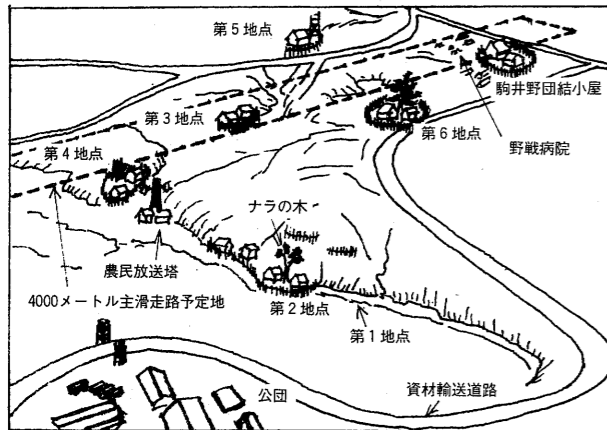
少年行動隊大活躍

親子で
砦を守る!

同盟休校を被った校数七校、休校した子弟二百数十名、バリ内座り込み参加者百数十名!(第一次)



●10/11月には工事用道路の測量・ボーリングが開始され、ブルドーザー前座り込み、ブルドーザー焼きうちなど一切の工事を阻止する実力闘争が続く。この過程で故戸村一作委員長をはじめ13名が逮捕された。



反対同盟は強制収用に対して地下壕
 作戦をとることに決定。71年1月6
 日から地下壕掘りを開始した。

●測量阻止闘争の勝利は、政府・公団をますます窮地に追いつめた。この政府・公団の圧力の下で千葉県土地収用委員会はただの一度も公開審理を開かず、現地での用地測量もほとんどできていないまま、ムリヤリ第一次申請分の土地の強制収用を裁決した。かくしてこの裁決に基づく県知事による代執行（期間は71・2・22から3週間とされた）をめぐる歴史的な三里塚第一次決戦を迎える。

●地下壕掘り作業の只中、作戦の総指揮をとっていた小川明治副委員長が急逝。遺体は遺言により、収用予定地内天浪共同墓地に埋葬された。闘魂必成の遺志を受け継ぎ、六カ所の皆と高さ十数メートルの農民放送塔を中心に地下壕を死守する態勢をつくりあげた。

小川明治副委員長長の死去



第一次強制収用阻止決戦

71春



家族ぐるみで 肉弾を武器に —三日間戦争—



●小川源氏ら、ふん尿弾を頭からかぶり、大地にしがみつく。公団の測量を阻んだ。

闘争 萩原久子（十三才）刃田

少年行動隊作文集より
 五月一四日は同盟休校の日でもあり少年行動隊にとっては勝利の日でもあった。

わたしたちは岩沢さん宅の山に行くことになった。十時ちょっと前に機動隊を先頭に私服、つづいて公団がやってきた。わたしたち少年行動隊は耳がさけるような声をあげて「公団帰れ」「私服帰れ」の大ふんとう。わたしは山の中からの声でも前の機動隊に聞こえるように叫びました。叫びながらも自然に涙がながれてきました。

そして青年行動隊の人が「だれか、二、三人前に出て抗議してくれ」と言われた。ちよびり恥かしかったけど、朝、母に言われた「闘争はかっこうだけのもんじゃねえ」と言われたあの言葉を思い出し友だちをさそって、二、三人、公団の前へ立ち向かった。「わたしは防音装置の学校なんかにつづいてはいらない」と言った。あふれる涙に手をおさえカヌランがしきりに写真やビデオを撮っている。人の気もしらずに思った。あのことはいまでも決心はかわらない。

こんなわたしたちの気持ちも知らずに政府公団は一に憲法、二に法律と言います。

人々がくるしめられても、法律は成立するだろう。もうこれではいけないと思つてわたしの目の前のデフの警サツを刀いっばい押した。そしたら山の中にいた少年行動隊も出てきたのでわたしたちは鬼にかなはず、夢中で押し返した。やはり罪もないわたしたちだけあって何の手だてもできず、ただ「あぶない、あぶない」の連発。わたしは「あぶなくない」と力強く公団に言い返した。

そんな横でわたしの手をしっかりとにぎっている母は、「子ども達までこんなにしょうけんめいなのがわかんないのか」とか、「おまいらも家にかえればか

わいい子どもがまってるんだっべ。その子どもと同じ子どもだよ」と抗議している。母の目には涙がかがやいて、ほほのこころまできていた。それは家では見られない母の闘争の顔であった。まわりのあちゃん達も母と同じ土をまもる闘争の涙がにじんでいた。

年をとったわたしたちの老人行動隊からも姿が見られる。わたしはまだそこらにちよろちよろしている公団に向かって「帰れ、帰れ」と言っても、うわの空、この人々もわたしたちと同じ人間、人間の中にも、あんな人間の生き方もあるかと思うと、がっかりしたような、うんざりしたような気がする。

やっと機動隊は道の向こうの麦畑にひきかされた。わたしたちの力で機動隊をおどらせた。うれしかった。ただもう、その一言だけでむねが、げんじになる。わたしは思わず友だちとたぎ合つて泣いてしまった。敵公団はむこうの方でマイクをつかっている。敵公団はむこうの方でマイクをつかっている。敵公団はむこうの方でマイクをつかっている。

こんなことがいくつかあって、バリケードに指一本もふれず、そのせいで公団は「測量は終わった」とおしみを言っていた。かえっていく姿には農民の勝利の拍手がいっせいにまきおこった。

農民は何の武器もない。機動隊はけい棒、ガス銃、おまけにたてまでもっている。農民は無抵抗で勝ったのだ。

おねがいです。わたしたちの平和な郷土を軍事空港になつてしまふのは絶対いやです。

かあちゃん、とうちゃん、学生、支援の人々をくするしめればわたしたち少年行動隊は先頭に立つて機動隊、政府に抗議します。



連日、闘う者を勇気づけた農民放送塔



地下壕を守れ

●第一次強制代執行阻止闘争。反対同盟は地下壕にたてこもり、わが身を立木やバリケードに鎖でしばりつけ、まさしく生命をかけ激戦につぐ激戦。約三千名による死守態勢を前に公団・機動隊は「農民殺し」とも言うべき血の弾圧をくり返した。この闘いで反対同盟の創意あふれる闘い、決死的な闘いと権力の暴虐無尽の弾圧は周辺住民の大結集を生み出したばかりか、全国的な三里塚闘争の波及力をつくり出した。

代執行二日目 三里塚地下壕守りぬく
友納知事のインチキを許すな！
反対同盟(71・2・23)

昨日、私たちは雨の中、懸命に抵抗し、友納知事と執行吏・機動隊には、バリケード・地下壕・立木に一指もふれさせはしませんでした。(略)

「じいちゃん、ばあちゃん、父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん、ねえちゃん」と一緒に頑張る」と叫び執行吏にむかっていった少年行動隊、老人、婦人、

「農民殺し」の友納と執行吏は、わたしたち二千名、周辺農民数百名、支援部隊二千名の全力をあげたたたかひによって、何を血迷ったのか、公団の土地の枯木を十本切って「これで反対

同盟の土地収用代執行は終わった」と宣言しました。(略)

本番はこれからです。本日、友納はより悪質な手段をつかって私たちの土地をとり上げようとしてくるでしょう。

全農民のみなさん、来たれ、三里塚へ。

闘争速報No.1より(71・3・17)

周辺地域の反応

現地に来た者が、驚くほど多い。「毎日行ったとか一四回行った」というのは、家族全員、毎日交代で「息子が三人行ってしまった」……駒井野の周辺部落はもとより、八街の



住野や、富里の武州、高野、八堀、多古の間倉、飯笹、成田の寺台周辺、久住等では部落のほとんどの人が「機動隊をなぐった」「公団に投げた」と、「武勇伝」を語り「今度地下壕をこわしに来たらせむし連絡してくれ」と言っていた。大清水と三里塚交差点では現地案内を行なっているが、最高一分間に一五〇台に達した。なお成田では、バスは超満員、タクシーの相のりで見地へヒストン輸送を行なった。

小・中学生の圧倒的支持——小学生が丘の上から「がんばれよ」「公団なんか殺していいんだぞ」と声をほりあげる(多古)宣伝カーに小学生三〇人があつまる、等々。

●周辺住民数千人が機動隊を逆包围



13日間の負傷者八三三名、逮捕者四六〇名

地下壕坐り込み50日目に
あたり全国の皆さんへ訴
える！ 地下壕の決意

反対同盟

全国の皆さん・全県民の皆さん・
三里塚・芝山の周辺住民の皆さん、
反対同盟の地下壕の戦いは今日も
また勝利しています。三里塚芝山農
民の決死の力はすでに十五日間、駒
井野五地点を完全に占拠し続けてま
いりました。四千米滑走路工事は整
地工事で二千五百米余り、路盤工事
で二千米余りで中断されています。

あしかけ六年間の私どもの思いは
いつの日か必ず今日のこの勝利を確
信していたからであります。もちろ
ん、戦いはまだ半ばであります。こ
の六年間、政府や空港公団は現地農
民になんをしてくださったのでしょうか。
農民を人間ともみない手ひどい仕
打ち、国家暴力は人の見ていないの
を知ると恐ろしいほどのむごたらしい
暴行を現地の農民に加えてきました
た。空港反対を叫べばまるで罪人同
然のあつかい。佐藤首相の云う「人
間尊重」「法治国家」の片りんすら
もこの三里塚にあつたのでしょうか。
友納知事の云う「納得のいく県政」
や「人命尊重」がどこにあつたので
しょうか。空港公団の云う「国策と
しての空港建設」や「日本の表立
関」という大義名分にどれほどの真

実があり合理的な根拠があつたので
しょうか。

あの二月二十二日からの「強制代
執行」なるものを思い起こしてみ
てください。あの八日間の三里塚地
獄絵はまぎれもなくこの六年間の
政府・公団・千葉県政が農民にして
きた悪事の総集約だったのでない
でしょうか。

木に登り代執行の不当を絶叫する
農民をふり落し、腰部骨折で六月月
間の重傷を負わせたあの事実を、ま
た、少年達への警棒の雨を、婦人達
を鎖で柵に結びつけたまま引きずり
まわす、これをどうして「人命尊
重」と「国策」だというのでしょ
うか。

地下壕に農民が入っているのを十
分承知の上で、換気口から放水車で
注水し、つぶれるとばかり機動隊を
穴の上に配備し、ブルドーザーを動
かすなど、公団の云う「国策として
の空港建設」とはあのような恐ろし
ことだったのでしょいうか。

三里塚で春ままだき二月・三月にか
けて起こった事件は、実は悪夢も
地獄絵でもありません。真正正銘の
農民殺しの土地取り上げだったので
す。権力がむきだしになって農民に
立ち向かった姿なのです。

今、私も反対同盟とまったく無
縁のところまで起こっているいわゆる
話し合いムードの花盛りをみるにつ
け、私どもには一つの感想が浮かび

ます。いったいこれまでに三里塚・
芝山に起こったことをあの人はな
んと心得ているのだろうか。農民の
苦勞や積もり積もって決して消える
ことのない口惜しい思い・怨念。そ
して空港反対を口にするにすら罪
人視したあのような人々がよくも白
白しくも「話し合いだ」「人命尊重
だ」「補償だ」と手の平をかえすよ
うに言えたものだ。そんなことで私
どもの決意を覆せると考えたなら大間
違いだ。これが私どもの卒直な感想
です。私どもはすべての害悪と悪政
のみならず、三里塚空港を粉砕して
私も自身の手で町を造り、土と農
民を育て上げていくのです。これが
日本農民すべての心に通ずることな
のです。三里塚で政府の身勝手な横
暴を許すことはすべての国民が明日
には三里塚農民と同じ目にあうこと
を許すことにつながるのです。いっ
さいの妥協を許さず、ただ、土を守
り育て、人間の正義を生きたること。
これなしに明日の日本の政治はない
ものと三里塚・芝山農民は確信して
戦いを続けています。駒井野五地点
を占拠し、防衛しているのです。だ
が、四千米滑走路工事を阻止され、
窮地に陥った空港公団は、明日から
でも地下壕破壊を強行せんともくる
んでいます。

あらゆる話し合い路線を拒絶して
私どもは戦い続けます。空港は日本
農民の名において絶対に造らせませ

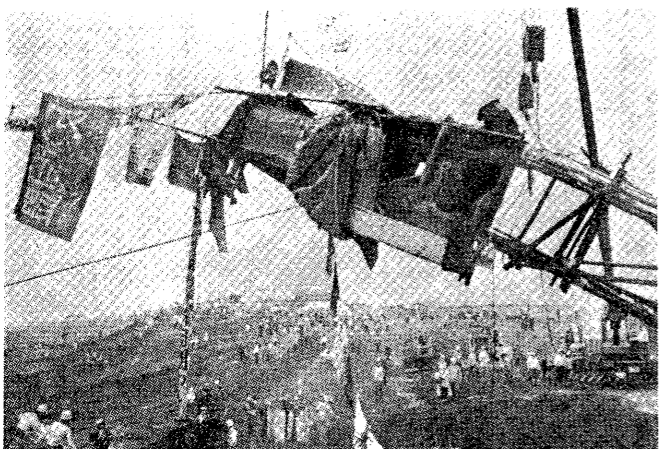
●第一次決戦後、新宿歩行者天
国でビラまき、デモを行ない市
民に訴える少年行動隊



ん。地下壕はいまや農民の生命です。
三里塚の壕はついに今日まで全国民
の支援と注目のなかで守り続けられ
てまいりました。これからも私ども
は決死の覚悟で壕を守り土を守り、
農民としての誇りをまげません。
全国民・全県民・全周辺住民の皆
さん、万難を排して三里塚の地下
壕を私どもとともに守り通そうでは
ありませんか。悪政の大元締を農民
の頭上から叩き出し葬りさろうでは
ありませんか。
(71・3・23)

日本農民の名において収用を拒む 71夏秋

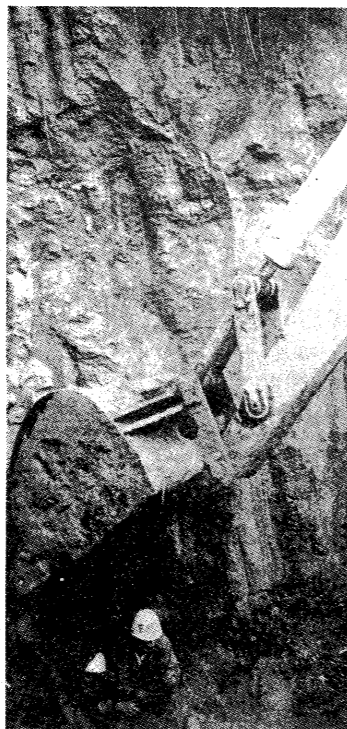
●第一次代執行に耐え抜いた一・二番地下壕と農民放送塔に対し、
政府・公団は千葉地裁の「排除の仮処分」(7・15)に基づいて再び
兇暴な攻撃をかけてきた。地下壕・農民放送塔死守をかけ、いわゆ
る「七月仮処分粉碎」の激烈な武装闘争が展開された。



「みなさん、この放送が聞えますか？農民放送塔は圧倒的
な重機械の攻撃との果敢な戦闘を貫徹し、いま放送を中断
します。塔が倒れても農民の魂は消せない。戦いは止まない。
さらに第二、第三の不屈の農民放送塔を建て全国の農民
とともに闘う。」最後のアジテーションを残して、クレー
ン車で引き倒される農民放送塔。

7月仮処分粉碎の激戦

逮捕290名
負傷500名



流血と怒号の二次決戦

●第二次決戦の突破口は、東峰十字路における武装遊撃戦一機動隊三名の完全せん滅の闘いによって切りひらかれた。数限りない権力の暴虐に怒りを込めて実力対決する三里塚闘争は、この時、権力をして「日本のベトナム戦争のはじまり」と言わしめた。

大木よねさん宅をめぐりうち代執行

戦闘宣言

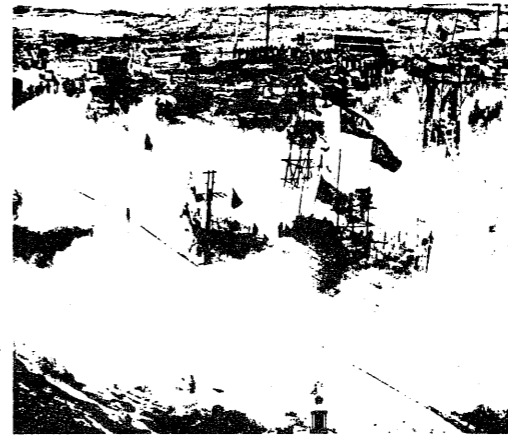
大木よね

みなさま、今度はおらが地所と家がかるので、おらは一生けん命がん張りま
す。公団や政府の犬らが来たら、おらは
墓所とともにフルドーサーの下になっ
ても、クソぶくろと正天が残して行っ
た
刃で戦います。

この前、北富士の人たちは、たった二
十人で、いまつとガソリンぶっかけて闘
ったから、ここで三里塚反対同盟が頑
張れねえってことはない。ここで頑張り

成田で機動隊員3人死ぬ

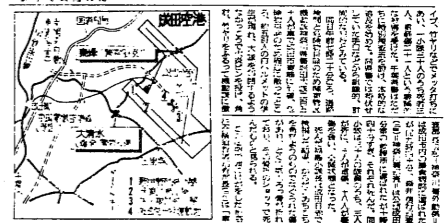
第2次代執行 最大の流血



学生500人待伏せ

神奈川県警の一小隊ほぼ壊滅
取囲みメッタ打ち

【本紙記者成田二日電】成田市の三里塚闘争現場で、神奈川県警の一小隊が、学生500人の待伏せに遭い、ほぼ壊滅した。学生側は、この日、成田市の三里塚闘争現場で、神奈川県警の一小隊を、激しい銃撃戦で迎撃した。学生側は、この日、成田市の三里塚闘争現場で、神奈川県警の一小隊を、激しい銃撃戦で迎撃した。学生側は、この日、成田市の三里塚闘争現場で、神奈川県警の一小隊を、激しい銃撃戦で迎撃した。



「計画殺人」と重視

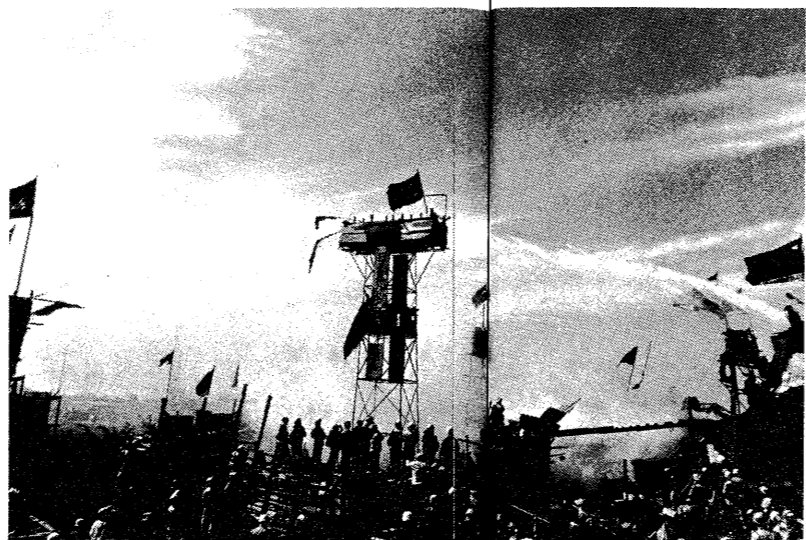
2カ所の終了宣言

代執行 天浪小屋もこわす

【本紙記者成田二日電】成田市の三里塚闘争現場で、神奈川県警の一小隊が、学生500人の待伏せに遭い、ほぼ壊滅した。学生側は、この日、成田市の三里塚闘争現場で、神奈川県警の一小隊を、激しい銃撃戦で迎撃した。学生側は、この日、成田市の三里塚闘争現場で、神奈川県警の一小隊を、激しい銃撃戦で迎撃した。

警官負傷123 逮捕234

●東峰十字路戦闘に恐怖した権力は、反対同盟に対する大弾圧を開始。71年暮れから72年にかけて青年行動隊を中心に、のべ一六〇名を逮捕し、数十名を傷害致死罪などで起訴した。



●主戦場たる駒井野でも、「日本農民の名において収用を拒む」という大カンパンの下がる大鉄塔からの火炎びん攻撃をはじめ徹底抗戦を続けたが、攻めあぐねた公団・機動隊は東峰十字路の報復の意図もあらわに、決死隊11名をのせたままクレインで引き倒し、炎につつまれるまま放置するという殺人的暴挙を行なった。

●9月20日、公団は「代執行は21日から」というウソの発表を流しながら、突如として大木よねさん宅の強制収用の奇襲攻撃に出た。だましうちで反対同盟・支援を寄せつけぬまま、脱穀中のよねさんの顔を激しく殴りつけ、路上にほうり出し、涙を浮べて抗議するよねさんの家を破壊し、わずかな家財道具の一切を奪い去った。国家権力による文字通りの農民殺し、土地強奪であった。

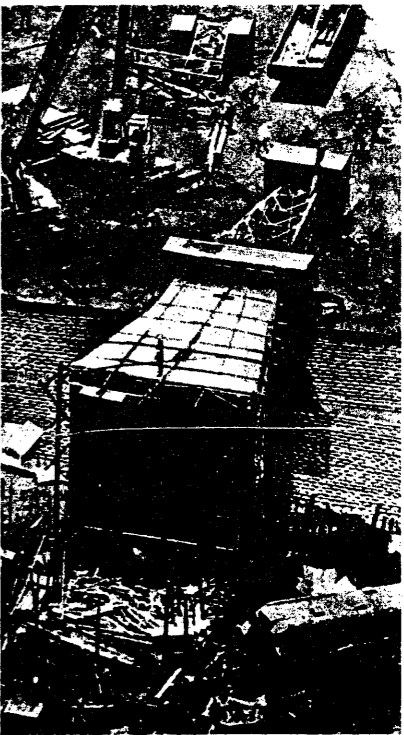


逮捕者491名、負傷者200名！

鉄塔やみ打ち撤去

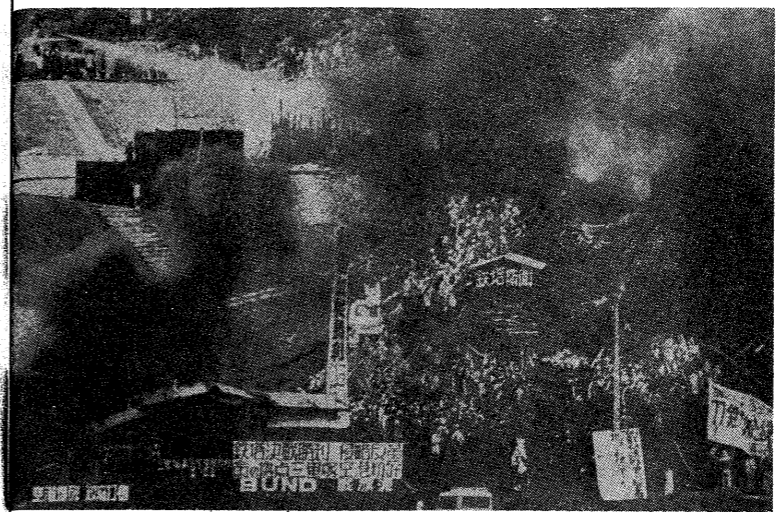
鉄塔破壊は公団、千葉地裁、警察の無法ぶりをさらけ出した。5月連休中に仮処分申請―決定、当事者である反対同盟にも一切明らかにならず強行した。機動隊二千百人を動員、現場検証を名目に鉄塔を占拠し突然執行に切りかえるという悪らつな手口であった。

▼午前3時 暗やみにまぎれ鉄塔下に機動隊を先頭に公団職員が結集。七名の反対同盟、支援を排除。急を聞いてかけつけた北原事務局長立ち合いの下、現場検証を強行



- ▼同8時20分 岩山大鉄塔の「検証」終了
- ▼同8時30分 同じころ 公団宿舍で中村千葉県警本部長「鉄塔撤去に着手する」と発表
- ▼同8時37分 第二鉄塔の「検証」終了 この間
- ▼同8時40分 執行補助員
- ▼同8時40分 反対同盟、支援は鉄塔への突入を試みる、機動隊と激突、ガス弾放水の中機動隊の厚い壁に守られながら千葉地裁の執行官二人があらわれ執行宣言を読み上げる
- ▼同8時40分 執行補助員
- ▼同11時5分 第一鉄塔への撤去作業開始
- ▼同11時42分 第一鉄塔倒される

戦うちぬく



一切の制約はとき放たれた

八日、天をもつ人民の怒りは嵐となって大爆発した。急を告げ知らされた全国の同志、仲間たちが、三里塚へと陸統とかけてきた。「鉄塔破壊弾効報復戦貫徹!!」一人一人の胸に煮えたる憎しみとおん念と怒り。それが渦となりさかまき、早朝よ

闘いは、戸村一作反対同盟委員長の戦闘宣言から始まった。「強盗的な抜きうち撤去は、権力の恐怖のあらわれだ。たとえ鉄塔を倒したとしても、われわれの心の鉄塔は絶対に倒すことはできない。権力が違法・不当な行為をやったということは、われわれの方にも制約が一切なくなつたということである。これは何をやってよいということだ。一人一人が

怒りの報復

蜂起しなければならぬ。鉄塔決戦は今からだ」と訴え、今何をなすべきかを明らかにしていた。更に、断固として闘いを継続する象徴として「鉄塔あとにヤグラを建てていく」ことが明らかにされ、万雷の拍手の中で確認された。「必ず復讐する!」これがわれわれの誓いの言葉である。六日早朝における反対同盟、現闘・支援の闘いを突破口に激闘は開始された。同日早朝わが現闘岩山団結小屋における戦闘、番神三叉路の闘い、岩山一帯における火炎ビン闘争、七日三里塚・成田一帯における交

番への攻撃、同時に岩山におけるバリケード破壊戦、この六七日闘争をもって、打ち続く大戦闘は実現されたのである。八日早朝第五・第七ゲートに対する火炎ビン攻撃をはじめとする各ゲートへの直撃、さらに千代田集會の大成功

と機動隊との激突、鉄塔跡地でのやぐら建設の闘い、フライトチェック阻止の闘い、三里塚芝山一帯にくりひろげられた怒りの戦闘は権力の不当極まりない暴挙に対する、全人民の当然たる正義の第一弾であった。

私どもの三里塚闘争も皆様の尽力を得ておかげさまで十二年目の新たな歳を迎えました。昨年初頭には、福田政権運命策の唯一のよりどころといわんばかりに年度内開港を宣言し、用地内農家攻めのため卑劣な手段を弄し、これに対する我が反撃の戦いに際してはガス銃の水平撃ちにより、同志東山薫を殺害するという絶対許すべからざる暴挙を行ってきたのであります。

反対同盟は、一大決意をもって断乎たる斗争宣言を発し、着実なる行動を起してまいりました。

行動の第一は、大鉄塔跡地にいっそう強固なる、不倒の要塞(地上三階鉄骨鉄筋コンクリート造り、屋上に鉄骨二階物置やぐら)を建設し未来永劫空港粉砕の誓とするスローガンをもって現闘に迫り込む決意を固めてあります。第二は、二期工事区内二千五百メートル滑走路南端に第二要塞として重武装の陣地構築を全力をあげて行っているところであり、毎日、機動隊、公団の警告、介入と戦いながら、作業隊は突貫工事をつづけてあります。

「三月三十日開港一までに万難を排して完工へと総力を投入してあります。用地内農家の永年にわたる健斗とあいまって、この大要塞建設を空港反対斗争の一方の軸とし、あらゆる戦術を駆使して何としても開港を阻み、開港へと追いつく決意を固めて、二月、三月の大戦場における反対同盟と全国の同志、友人が総力を結集し、動労千葉の果敢なるジェット斗争と備蓄輸送に対する全力ストライキの戦いと合せての一大決戦を戦い抜く決意です。

思いかえせば、反対同盟にとりましては、七一年代執行に対する地下激戦と大包围の激戦、岩山大鉄塔の建設、そして此の度の二度の大要塞建設事業を中心とする開港粉砕の戦いと、いよいよこの正念場における重大かつ決定的な場面に突入いたしました。

反対同盟はこの総力戦にのぞんで農民としての歴史的使命をなすことをわが本懐とし、この戦いに勝たなければ、のちの戦いも無きが同様と決意を打ち固めたところでありました。

何が何でも目標を達成し、我と我が同志の戦いに万遺憾なきを期したい所存であります。

全国の奇兵、近隣・周辺に農民・住民の皆様、左記の通り戦いの日程を決めましたのでご参加をいただき、あらゆる戦線のあることをご検討のうえ、おののけになりべきところを決めていただきたいと思います。

妨害塔またニヨッキリ

火災
仮眠の機動隊員襲う

成田 また泥沼のゲリラ



成田空港建設現場のゲリラ活動の様子が写っています。背景には建設用の建物や設備が見え、前景には活動している人々の姿が伺えます。



ガス銃水平撃ち

「三月三十日開港一までに万難を排して完工へと総力を投入してあります。用地内農家の永年にわたる健斗とあいまって、この大要塞建設を空港反対斗争の一方の軸とし、あらゆる戦術を駆使して何としても開港を阻み、開港へと追いつく決意を固めて、二月、三月の大戦場における反対同盟と全国の同志、友人が総力を結集し、動労千葉の果敢なるジェット斗争と備蓄輸送に対する全力ストライキの戦いと合せての一大決戦を戦い抜く決意です。

思いかえせば、反対同盟にとりましては、七一年代執行に対する地下激戦と大包围の激戦、岩山大鉄塔の建設、そして此の度の二度の大要塞建設事業を中心とする開港粉砕の戦いと、いよいよこの正念場における重大かつ決定的な場面に突入いたしました。

反対同盟はこの総力戦にのぞんで農民としての歴史的使命をなすことをわが本懐とし、この戦いに勝たなければ、のちの戦いも無きが同様と決意を打ち固めたところでありました。

何が何でも目標を達成し、我と我が同志の戦いに万遺憾なきを期したい所存であります。

全国の奇兵、近隣・周辺に農民・住民の皆様、左記の通り戦いの日程を決めましたのでご参加をいただき、あらゆる戦線のあることをご検討のうえ、おののけになりべきところを決めていただきたいと思います。

82年1月17日、反対同盟は日帝一空港公団による反対同盟切り崩し攻撃、「話し合い」攻撃に対し、一切の話し合い拒否、二期阻止の決意を内外に示すとともに天神峰やぐらを強固なものへ建てかえ、さらに大看板を新たに設置した。

闘いの陣型 着々と築く

閣議決定16カ年弾劾
7・4集会宣言

集会宣言

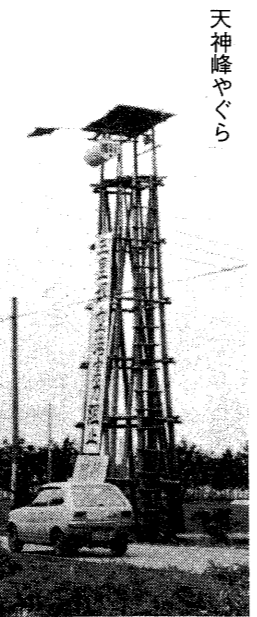
一九六六年七月四日の三里塚空港設置の閣議決定から十六年、われら三里塚芝山連合空港反対同盟は闘争の原点にたどりかえり、三里塚闘争の勝利を決意し宣言する。政府・公団はすでに二期工事着手にむけ、ありとあらゆる攻撃をかけてきている。本集会にははまる夏から秋にかけては三里塚闘争最大の決戦である。正義をつらぬき怒りと勝利への執念をもって立ちあがるべきである。

政府・運輸省・公団は条件派組織づくりを策動し、同盟を解体し二期工事の着手を狙っている。二期工事は反対同盟の破壊なくしてありえない。そのために昨年末より「話し合い」攻撃をしかけ、反対同盟の路線の転換をせよ、条件派組織づくりの手がけようとした。反対同盟はこれに攻撃を痛め、粉砕し結核において勝利した。政府・公団は、闘いにおいてついに、条件派組織構想と条件和解案十一項目を公表し、公団総裁中村大造は、公然と「話し合い」を要求して来た。

反対同盟は、いかなる「話し合い」も拒否する。「空港絶対反対」一切の話し合い拒否こそが勝利の道であり、二期阻止、空港廃港を闘いとする基本原則である。

われら反対同盟は、この地に悠然と農業を営み、日々晴れ晴れとつみ重ねている。用地内天神峰、東峰部落は、除草剤配布を口実とした公団の港へを摘発し、一時に撃退した。用地内外、空港周辺の闘いに分断をもちこむ成田用水推進にたいして、芝田青年行動隊は、「成田用水反対」の声明を発した。公団用地を貸しつけ攻撃にたいして、自主耕作委員を選出、同盟の団結をかたむける横断自主耕作を開始した。国道二九六号をめぐる同盟一坪用地強奪攻撃を粉砕し、公団の事業計画変更を拒否した。バキッパツ公団の買収攻撃と実力で撃退している。

天神峰に新設された大看板



天神峰やぐら

三里塚芝山連合空港反対同盟

日本人民の未来をけし、二期決戦の勝利、三里塚軍事空港の粉砕に再躍して立ちあがる決意をここに宣言する。
一九八二年七月四日

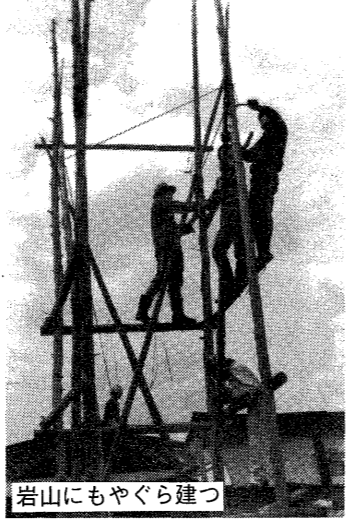


5・23ティーチン広場

5/23反戦・反核東京行動 反戦の砦 三里塚闘争を訴える

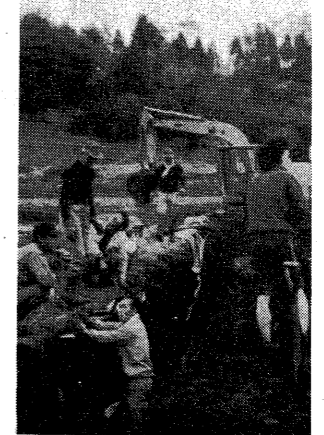
5・23反戦反核を掲げた東京行動は四〇万人の大結集で闘われた。代々木公園反核平和ティーチンの広場においては三里塚を闘う戦闘的勢力が一大結集し、会場をぎっしりと埋めつくした。三里塚反対同盟北原事務局長は、反戦の砦としての三里塚闘争の一七年間闘いを国家権力と実力で対決して来たこと、二期工事を実力で阻止し空港廃港に向けた反対同盟の決意を力強く述べていった。

82年5月16日滑走路南端の岩山にもヤグラ建つ。岩山団結小屋は成田治安立法の5度目の再適用攻撃がかけられ、こうした攻撃をはね返し団結小屋死守、拠点化に向けて強化されている。



岩山にもやぐら建つ

草の根にも、いろいろな草の根があります。私たち三里塚の野良に生きる草の根は、十七年間、空港建設に反対してきました。私たちが負けることなく根をはり、新芽をだしてこれたのは、私たちが特別に強い人間だったからではありません。一人の人間として、農民として、とても目をつぶることができないほど、政府のやり方がひどすぎた。号令ひとつで、アジアや太平洋の人々を無惨にも虐殺し続けた日本軍に、悲しいほど似ています。三里塚の大地をけちらかす為政者の形相をみて、私たちがいつか危惧していたのは、日本の軍隊がまた再び、アジアや太平洋にむかって侵略をはじめたのではないかと、どうして、この動きを止めなければなりません。私たちは今日、このような思いで、この集会に参加しました。(反対同盟の5・23ピラより抜粋)



関連事業をうち砕いて農に生きる三里塚農民



木の根大風車

二期阻止決戦の勝利にむけて

80年代

三里塚闘争年表

- 1962年 第二国際空港建設を閣議決定
- 1965年 11月 富里に内定。反対運動激化し、変更
- 1966年 6月 友納知事、三里塚案を了承
- 6・29 三里塚空港計画図発表
- 7・4 閣議、三里塚空港設置を決定
- 10 新空港閣議決定紛争総決起大会
- 三里塚芝山連合空港反対同盟結成
- 10・2 成田市営グラウンドで「三里塚空港撤回公団撃退総決起大会」四〇〇〇名結果
- 1967年 1・9 芝山町空港賛成派町議二六名に對するリコール運動開始。四日間、基準数に達した。21日提出。御料牧場測量阻止闘争
- 2・15 成田市を訪れた大橋運輸相を、成田駅にカンヌスにし、抗議闘争
- 6・26 ヤリ、ふん尿弾で対決、一六名逮捕
- 10・1 十余名、東峰で測量阻止、逮捕者二名
- 2 木の根、横堀で阻止闘争。小川源さんふん尿を頭から浴びて抵抗。逮捕者二名。公団は6日間予定を三日間で打ち切るのちに「二日間戦争」とよばれる
- 10・22 収用委「第四回公開審理」同盟は、千葉市まで40キロを自衛を越える耕うん機でデモ。会場内で少年行動隊一〇〇名がデモ
- 11・14 31 青年隊を中心に反対同盟。全国各地の闘争拠点の交流
- 12・6 強制収用粉砕、全国住民運動総決起集会、三里塚第二公園に、一、一〇〇名参加
- 1971年 1・6 強制代執行に備え地下壕掘り開始
- 13 小川明治副委員長死去。15日、同盟葬。遺体は遺言により四〇〇m滑走路予定地内、天浪臺地に埋葬
- 2・1 公団「七二年開港」を宣言
- 15 少年行動隊、芝山中学校で校長らと大衆団交
- 22 強制代執行開始。第一日この日は阻止。同盟・支援三〇〇〇名。少行一四二名同盟休校を開始。以降連日、血みどろの闘い
- 8・15 「空港粉砕強制測量実力阻止平和集会」(千葉市本町公園)に四〇〇〇名。少年行動隊結成
- 9・11 北富士忍草母の会と婦人行動隊木の根で交流集会
- 10・10 老人決死隊結成
- 15 強制外郭測量阻止闘争、反対同盟一五〇〇名、機動隊二〇〇〇と激突。逮捕者二、重傷一、日共一民青敵前逃亡
- 11・3 空港粉砕総決起集会。はじめて三派全学連参加
- 12・10 日共、反対同盟幹部を中傷、組織破壊工作を展開
- 15 反対同盟、日共排除を決定
- 1968年 2・26 空港反対同盟、砂川反対同盟、全学連の共催「三里塚空港反対決起集会」成田市営グラウンドに三〇〇〇名。戸村委員長はじめ一五五名負傷、逮捕者数十名
- 3・10 全国反戦、反対同盟共催「空港粉砕・ベトナム反戦総決起集会」成田市営グラウンドに八〇〇〇名。解散集会(機動隊乱入、逮捕者数十名、重傷三五、負傷三)
- 3・6 「代執行終了」を宣言。地下壕は死守
- 8 地下壕への攻撃は止まる
- 5・12 同盟、第一鉄塔建設
- 9・16 第二次代執行開始
- 大木よねさん宅をまじつちで強制収用
- 12・8 青年隊への大弾圧は止まる
- 1972年 3・1 同盟、第二鉄塔建設(12日完成)
- 15 本格ハイフライン着工
- 9・21 国計画挫折、暫定輸送計画発表
- 1973年 10・1 暫定ハイフライン工事開始
- 12・17 大木よねさん死亡
- 1974年 1月 反対同盟、高浜入干拓阻止闘争に連帯して、現地闘争に参加
- 10・10 三里塚現地集会に二六〇〇〇余名。鉄塔死守、開港阻止の闘いへ前進
- 1975年 10・12 鉄塔決戦準備集会。岩山大鉄塔は、空中団結小屋の完成により更に強化される
- 1976年 2・22 産土参道防衛・鉄塔破壊道路建設阻止集会に六〇〇〇名結果
- 5・3 空港公団「5月7日ポータリングによる土質調査とクイ打ちを主体とした測量開始」を宣言、4日から、公団・機動隊と連日の実力闘争を貫徹(7月中旬まで)ふん尿作戦(黄金作戦)は止まる
- 8・24 15 反対同盟の団結強化をめざし、単独の武装デモ。参加者一〇〇〇名
- 11・24 三里塚第二公園で「三里塚空港粉砕・ポータリング調査実力阻止全国総決起集会」闘争開始以来最大規模の動員を実現。反対同盟一〇〇〇名、全学連四〇〇〇名、反戦青年委他三〇〇〇名
- 1969年 3・30 政府・公団の「四月着工」五月着工」等のアドバランを粉砕するため「事業認定申請粉砕全国集会開催。一万二〇〇〇名
- 7・22 老人行動隊20名、宮内庁大総御料牧場」の移転に反対し、宮内庁抗議闘争。二重橋座り込み
- 8・18 御料牧場閉場式に反対、同盟二〇〇〇名が突入、粉砕
- 9・8 8・18闘争を口実に、反対同盟百数十名
- 5・3 反対同盟、全学連による「空港反対決起集会」。三里塚第二公園から公団分室まで12キロをかけたデモ、公団分室に突入を敢行。逮捕二三五名、負傷多数
- 31 反対同盟、全学連による「空港反対決起集会」。三里塚第二公園から公団分室まで12キロをかけたデモ、公団分室に突入を敢行。逮捕二三五名、負傷多数
- 1970年 1・15 強制測量粉砕・収用法粉砕全国総決起集会。七〇〇〇名
- 2・19 第一次強制測量阻止闘争。同盟休校の少年隊を含む家族ぐるみの闘い展開。公団は予定を一日に縮小して翌20日の測量を放棄
- 3・13 東京地裁へ「事業認定取消訴訟」を提起
- 5・14 第二次強制測量阻止闘争に勝利
- 5・12 7・4 青年隊、団結小屋に地下壕建設
- 9・30 第三次強制測量阻止闘争。事業認定切れを目前にした公団は、78haを一挙に測量すると宣言。岩山、天神峰でバリケード、竹
- 5・12 成田治安法成立
- 15 同法、岩山団結小屋及び木の根団結舎に初適用
- 13 公団、土地収用法にもつづく「事業認定」を申請
- 28 事業認定粉砕全国集会に二万三〇〇〇名。指名手配中の萩原青行隊長、公然と登壇
- 10・14 成田署員が萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 11・12 ブルドーザー前に座りこみ工事実力阻止闘争(工事用道路建設阻止)戸村委員長以下一三名逮捕
- 1971年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1972年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1973年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1974年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1975年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1976年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1977年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1978年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1979年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1980年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠

- 1967年 3・6 「代執行終了」を宣言。地下壕は死守
- 8 地下壕への攻撃は止まる
- 5・12 同盟、第一鉄塔建設
- 9・16 第二次代執行開始
- 大木よねさん宅をまじつちで強制収用
- 12・8 青年隊への大弾圧は止まる
- 1972年 3・1 同盟、第二鉄塔建設(12日完成)
- 15 本格ハイフライン着工
- 9・21 国計画挫折、暫定輸送計画発表
- 1973年 10・1 暫定ハイフライン工事開始
- 12・17 大木よねさん死亡
- 1974年 1月 反対同盟、高浜入干拓阻止闘争に連帯して、現地闘争に参加
- 10・10 三里塚現地集会に二六〇〇〇余名。鉄塔死守、開港阻止の闘いへ前進
- 1975年 10・12 鉄塔決戦準備集会。岩山大鉄塔は、空中団結小屋の完成により更に強化される
- 1976年 2・22 産土参道防衛・鉄塔破壊道路建設阻止集会に六〇〇〇名結果
- 5・3 空港公団「5月7日ポータリングによる土質調査とクイ打ちを主体とした測量開始」を宣言、4日から、公団・機動隊と連日の実力闘争を貫徹(7月中旬まで)ふん尿作戦(黄金作戦)は止まる
- 8・24 15 反対同盟の団結強化をめざし、単独の武装デモ。参加者一〇〇〇名
- 11・24 三里塚第二公園で「三里塚空港粉砕・ポータリング調査実力阻止全国総決起集会」闘争開始以来最大規模の動員を実現。反対同盟一〇〇〇名、全学連四〇〇〇名、反戦青年委他三〇〇〇名
- 1969年 3・30 政府・公団の「四月着工」五月着工」等のアドバランを粉砕するため「事業認定申請粉砕全国集会開催。一万二〇〇〇名
- 7・22 老人行動隊20名、宮内庁大総御料牧場」の移転に反対し、宮内庁抗議闘争。二重橋座り込み
- 8・18 御料牧場閉場式に反対、同盟二〇〇〇名が突入、粉砕
- 9・8 8・18闘争を口実に、反対同盟百数十名
- 5・3 反対同盟、全学連による「空港反対決起集会」。三里塚第二公園から公団分室まで12キロをかけたデモ、公団分室に突入を敢行。逮捕二三五名、負傷多数
- 31 反対同盟、全学連による「空港反対決起集会」。三里塚第二公園から公団分室まで12キロをかけたデモ、公団分室に突入を敢行。逮捕二三五名、負傷多数
- 1970年 1・15 強制測量粉砕・収用法粉砕全国総決起集会。七〇〇〇名
- 2・19 第一次強制測量阻止闘争。同盟休校の少年隊を含む家族ぐるみの闘い展開。公団は予定を一日に縮小して翌20日の測量を放棄
- 3・13 東京地裁へ「事業認定取消訴訟」を提起
- 5・14 第二次強制測量阻止闘争に勝利
- 5・12 7・4 青年隊、団結小屋に地下壕建設
- 9・30 第三次強制測量阻止闘争。事業認定切れを目前にした公団は、78haを一挙に測量すると宣言。岩山、天神峰でバリケード、竹
- 5・12 成田治安法成立
- 15 同法、岩山団結小屋及び木の根団結舎に初適用
- 13 公団、土地収用法にもつづく「事業認定」を申請
- 28 事業認定粉砕全国集会に二万三〇〇〇名。指名手配中の萩原青行隊長、公然と登壇
- 10・14 成田署員が萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 11・12 ブルドーザー前に座りこみ工事実力阻止闘争(工事用道路建設阻止)戸村委員長以下一三名逮捕
- 1971年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1972年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1973年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1974年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1975年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1976年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1977年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1978年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1979年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠
- 1980年 11 青行隊長萩原氏宅で、訪問中の青行隊長柳川秀夫氏を誤認逮捕。反対同盟、成田署を抗議闘争で占拠

反対同盟は闘う

(敬称略)

16年の地平うけつき

事務局長 北原鉞治

この十六年間にわたり我われは自分たちの生活と権利を守るために多くの犠牲をはらってまいりました。現在四十三件のぼる裁判が毎日闘われているわけですが、何をこれは意味しているか。まさに空港建設をおし進めようとする政府・空港公団と全国の人民の骨身をけずる闘いのなかからそのような偉大な裁判闘争を我われは闘っているではありません。

我われの闘いはまさに農地死守から始まった。十六年間のなかで権力があらゆる暴挙をくり返してきているなかですべてを突き出した。人民が生きたるためなら当然闘わなければならぬ。日米合同演習でも明らかのように、成田空港は軍事侵略基地として戦争になれば使用することになっている。我々は十六年間軍事空港反対という位置づけをもって闘ってきた。いま世界の人民は核によって滅亡するかもしれないという状況が生まれているわけです。我々の闘いは、まさに全人民の生命を守る



三里塚闘争の歴史をふりかえってみると、六七年10・10外郭測量によってくわちが行なわれた。その中で初めて機動隊の暴力を我々は目の前にした。とりわけ駒井野においては、婦人行動隊員が機動隊に靴で蹴りあげられ生命の危

険にさらされたことがあります。その日から我々は身をはっての實力闘争を展開してきた。

六八年二・二六日の闘い。七一年第一次強制代執行阻止闘争。七月の地下壕、農民放送塔の闘い。あの「日本一の貧乏人だ」と自ら主張した大木よねの闘い。また第二次代執行9・16東峰十字路における我々の激闘の闘いがあつた。そして横堀要塞戦や管制塔の攻防の闘い。この人民が闘ってきた大きな歴史、それが闘うものの最高の財産ではないかと思ひます。我々は決してその財産を見失うことなく継承して闘っていかなければならぬ責任を負っています。

反対同盟の、全ての闘う人々の解体なくして二期工事は絶対にできない。我々が闘っていく限り三里塚闘争は必ず勝利する。

空港の現状を見た時、なぜあの二本の滑走路がでないのか、それは空港建設そのものが全人民にとって許せないからでないのだ、ということ私たちは再度確認していかなくてはならない。空港公団は「話し合い」攻撃で同盟の基本路線の転換をせまってくる。我々は十六年間にかけた闘いの質をもって一切拒否で闘う。

一握りの土も渡さぬ

木の根 小川源



昭和四十一年六月二十二日に閣議内定されたとき成田市長が三里塚小学校の講堂に各部落、区長を集めた、内定についての説明会で文書を読みあげ、我々の意見を何一つ聞こうとせず退散したことがありました。このときから今日まで十六年間、我々は敢然と立ちあがっているわけでございます。

この夏、秋にかけて彼らはどういった攻撃を加えてくるかわからないけれども、我々反対同盟は實力闘争をもってうち破る、そういう決意でございます。小川源についていこうと言ったからには必ず勝利してみせます。権

力が真向うから我々住民あるいは農民に対する攻撃をかけてふりかかってくるけれども、我々反対同盟を中心皆さんの支援によって権力を真向うから粉砕できるのです。

したがって我々反対同盟はひと握りの土地も絶対譲渡しない。絶対に農地死守、農地を武器とし、真向うからこれを粉砕していく。何がなんでもこの三里塚の闘いというものは勝利しなければならぬ。皆さん！本場に廃港までどうか頑張ってください。我々反対同盟はその先頭に立って最後まで闘いぬく。

許せない農民無視

東峰 島村良助

第一次強制代執行阻止闘争関係公判での証言より抜粋

入植をした当時、証人が入植をした土地は、どのような状態になっておったんでしょうか。半分は竹林であつて、半分は松山でした。入植は、私と家族は知人の紹介によって十余名に来て寄留してから、入植する条件は戦災復員者対象にして、県有林の払い下げを村が受けて、それで村がその村の戦災復員者を対象として入植させたわけですね。それで私も、復員者でもあり、戦災者でもあるということで該当して、あそこに入植できたんです。

入植をされて、証人が開墾された土地というのには、どのくらい面積なんですか。それは、約一町一反です。そうすると、現在証人が所有されている畑については、当時開墾されたものということになりますか。そうです。それと、その一町二反ではあの地域で農業一本では、生活が出来ない状態なんですね、その後、何とかあの地域農民として農業の基盤の立つように、努力に努力して求めた畑が約四反歩ほどあります。

それからしばらくして、牛を飼われたということはありませんか。それは、二六年ごろと思ひます。その牛も、なかなか配給の肥料では少なくて、私どもがその当時配給の肥料として受けたのは、洗たく用の小さいバケツに一杯くらいしかもらえなかつたような状態で、やっぱり家畜を飼うという

ことがたい肥を作るあれにもなるし、酪農振興を農林省が奨励したのに従って、牛を飼ったわけです。

開墾の当時、肥料などについては国ないし県のほうから、配給されるというようなおつたんでしょうか。特別に、開墾者に対して肥料の配給ということはなかつたです。

そうするとやっぱり、木やそういうものを燃やしたものを肥料にするとか、そういうことで肥料を作られたわけですか。その当時はやはり、草を刈って、たい肥を作るとか、あるいは草をそのままたい肥にするとか、あるいは草をふませてそしてたい肥を作ると、そのほうがずっと肥料成分が強いから、また農地も一町二反では生活してられないので、何か兼業をやらなければならぬ、農民として手取り早く兼業につながるのには、家畜だというふうな考ええから、牛も飼いましたし、豚も飼いました。

それで、現在は先程証言されましたように、鶏を飼っておられるわけですね。鶏を飼うようになる少し前ですけれども、農協に融資というんでしょうか、お金を貸してほしいという申込みをなされたことがありましたか。

それは、鶏を飼う時点で、私はそのときは鶏はまだ全然経験がありませんし、養鶏雑誌を見ると、今言ったようにバタ

正義の闘いつらぬく

天神峰 小川嘉吉

今から十六年前の七月四日の閣議決定によれば、四十六年の四月一日に開港するという事で決定され、強行されたのでありますが、いまだ十六年たっても滑走路一本で完成できないのです。最高機関である閣議決定が我々の前に打ち砕かれたという事、これを明らかにしなければならぬと思いません。



そして我々を追い出すために土地収用法という法律までかけて、我々を死刑台に乗せて十二年と六カ月たちますが、それもとうとう何もできずに今になってるのでございます。

最後の切り札という土地収用法という攻撃をもってしても我々を追い出せなかったという事が、いかに我々百姓の闘いが正義だったかという事を明らかにしたと思えます。十六年間のなかにおいて、政府は我々を追い出すためにあらゆる策動をかけてきたのでありますが、金とモノによって運動をやめさせようという策動もありま

すが、我々はこのようにゴネ得とか、そういうものではなくて、こういうことには絶対屈せず、どこまでも頑張ってきたのが十六年間でございませう。

三里塚の闘いは、我々だけの闘いではなくて、日本のあらゆる闘いの原点になっていっていると思えます。

権力も警察力も十六年たつてもわれわれを倒せなかった。権力の犯罪性を追及しこの闘いに勝つことが、自分の将来にとつても大事な闘いだと考えております。

(以上三氏、七・四集会発言より)

「用地内」とともに闘う

白根 笹川巳三夫



金の返済が大変でこりているというのが実状だ。あらゆる懐柔策を粉砕して断固闘いぬく。

政府とテールブルについての反対運動ではだめだ。政府のいう「話し合い」は、空港建設を進めるためのものではかない。空港絶対反対の基本路線は、どんなことがあってもくずしてはならないと思う。千代田学区の反対同盟は、二期決戦に向かっている。第二期決戦に向けての結束を着々と固めている。「用地内」の人たちとともに頑張りたい。支援の人たちにも頑張ってもらいたい。

成田用水を許さない

中郷 鈴木幸司

十六年前の七月四日、それは反対同盟が全員怒りをもって、決起した日でありました。その怒りを忘れてはならないし、いまでも忘れることができません。

十六年間の長い年月の闘いのす

えに、いま菱田学区と反対同盟にかけられてきた成田用水の問題があります。この攻撃は、やはり反対同盟をきり崩す懐柔策である。それ以外にない。

り！養鶏によって狭い面積の土地で大羽数が飼え、そして管理もしやすい、多鶏増産もしやすいと、これがやはり自分の経営につながるということで、その当時のころから近代化資金というのを政府が貸し付けているということで、三六年前その近代化資金を借りて、三人で一萬羽養鶏をやるという計画で、その窓口が農協であるから農協に申し込んだわけなんです。

それで、融資は簡単に受けられたんですか。近代化資金としては、個人なら二〇〇万、団体なら一〇〇〇万借りられるというので、三里塚養鶏組合を作って農協に申し込んだら、農協の組合長の言うのには、あんたは養鶏の経験があるのか、現在羽数は何羽いるのか、という事を問われたときに、まだ経験もありませんし、現在も羽数もありませんと言ったら、それはあんた方には融資は出来ない、養鶏というのの一つの事業なんだから、経験があつて初めてそこに事業というものは成り立つんであつて、無経験のところには出せない。

だけれども私は今まで養豚もやり、酪農もやり、そしてなかなかそれが兼業のほりにつながらなくて、その中で養鶏というものが本当になつてと信じ込んで申し込んだのであつて、この資金は農協で貸すんじゃないか、国が貸すんじゃないか、なぜ窓口の農協で断わるんだ、という事を言ったら、農協としても、ただ窓口というだけのものではないという事で、断られたわけなんです。

証人が、現在建設をされてる空港に反対している理由というのは、どのようなところにあるわけですか。

まあ国は、百姓だから土地を与えてやれば農業は出来るんだと、そういうことで代替地とかいうようなことを言っているか。私らが納得のいくような答えが一つも出て来ない。そういうと結局は、富里の農民は大農であり、そこで農業一本で生活の基盤が持てるんだから、ここに空港が出来ないと、だけれども我々は戦後の開拓者であつて、農業一本で生活の基盤が出来ない、いわゆる農閑期には土方をやつたり、また、私も含めて戦災復興員者であつて、それが東京で家族を持ってあそこに入植した当時は子供が五つ五つで少さかつたけれども、それが二〇年もたつとも働けるようになって、子供は他産業に行つて三ちゃん農業をみんなしているというよりな形で、これは富里では反対されたけれども、ここでは反対はいらうと、そういうふうに国が考えたんじゃないだろうか、私はそう想像するんですけれど。

証人の経験で、現在建設をされている空港が戦争等のときに、使われるんじゃないかという事、反対理由の一つになつておりますか。

はい、それは軍事空港ということで、これは単なる民間空港ではないかと私は判断しております。

それは、証人が戦争を経験されて、そのような経験の中から判断をされているということですか。

はい、大東亜戦争のときに私は東京の下町で生活してました。しかし、あの東京の下町も二〇年の三月九日に焼けたわけです。

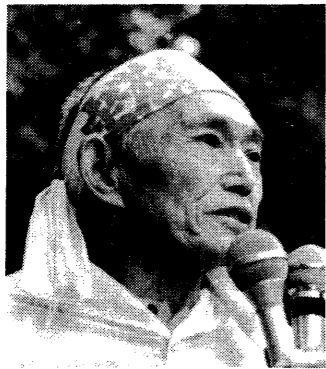
あの空襲の前に何回も、私のすぐ隣の家が焼いた弾を落とされ、亀平小学校は爆弾を落とされて、コの字型の学校が真ん中が吹き飛ばされて、たまたまそこに宿直だった女教員が背骨を折つて、治療が出来ないからと言つて、学校で治療をしていたのが、一週間後に焼いた弾によって焼かれていると、その人間がそこで焼け死んでしまったとき、もしアメリカが

もしないけれども、私らにしてみれば本場に土地になじみ、土地を知り、そしてそこに農作物を植えてこそ、生産が上がるんであつて、私の家の前の畑であっても、ここにさつまいもを作ればとれるとか、そういうことを知るにはやっぱり一〇年かかるわけです。それで、ここには要素が足りないのか、又リンが足りないのか、その土地の作物を見ながら、そこで収入をあげるには何年もかかるし、ただ土地があれば百姓は出来るんだという事ではないと、私はそう考えております。

それから、国が国際空港として羽田が行き詰つてきたから、何とか都心から二〇〇キロ以内の国際空港を建設しなければならぬと、そういうことで運輸省の中でどこに作るのかという事で、これは運輸審議会が何かで審議された中で、木更津に作るのか、あるいは浦安に作るのか、霞ヶ浦に作るのか、富里に作るのか、そういう中で富里に内定して、あそこ建設するという事で、富里住民は約二・三年の間反対して突如三里塚に来た。私らにしてみれば何で三里塚に来たんだろ、なんで国は富里を断念したのかと、地層が悪いとか、あるいは気象状況が悪いとか、あるいは航空路の関係とか、そういうことがあるんだろけれども、私らの考えだと、富里であつても私らのところであつても、別に気象状況が違うとか、航空路が違うとか、地層が違うとかいう判断も出来ないし、なんでここに来たんだろという、不安を持つたわけなんです。

それに対しては、やっぱり富里の農民が県や運輸省に陳情に行つたので、それと同じに陳情に行つたけれども、私らには代表者だということで行く人に、そういう話もしてくれという事で頼んでも、

東京を焼け野原にしよというんだつたら、なぜ東京でも真ん中に落とさないで、この東京でも下町といわれるところに落とすんだろ、そういうことを考えたときに、あそこには鉄工所もあるんだ、また、あそこが工場地帯であるがゆえに平和なときは平和産業としてその工場は動いていられる、これがいざ戦争となると軍事工場になつていくと、それがゆえにあそこが爆撃されるんだという事を考えると、この飛行場も、将来絶対に日本の国が他国とそういうことがないと言ひ切れないとしたら、これは軍事空港として使われるんだというふうに、あの大東亜戦争を経験した中から私は判断するので、あれは単なる民間空港ではなく、軍事空港だというふうに言つて、反対して来たわけなんです。



闘う全人民の怒りをもってこの成田用水事業を粉砕し、たたきつぶす以外ありません。この闘いは軍事空港を粉砕する闘いの第一歩であると私は考えます。

この間、私もは数多くの弾圧をはねのけ、闘いつづけてきました。これからさらに大きな人民のうねりをつくりあげ、闘いを全人民の歓びとしましょう。

夏から秋にかけて闘いは大きく展開します。軍事空港粉砕の闘いは、全人民の使命であり、同時に



生きがいではないでしょうか。闘うことの歓びを十分に感じたいから闘おう。(七・四集会発言より)

闘いこそが生きがい

岩山 岩沢吉井



今までのむこうのやり方を見ると、二期は、できることから着工し、既成事実化していくという

ことが充分考えられる。その意味でも、事業認定後二〇年にあたる八五年を射呈に入れて、来年、八三年が大きな決戦になると思う。二期はあくまで「用地内」が中心だ。だからといって、ただ頑張るだけだ。それだけの立場で何ができるかを考えて、心をひとつにするのが大事だ。「話し合い」問題も、敵は、それなりの成果をあげたつもりかも知れないが、逆にそれをプラスに変えていく力を反

対同盟はもっているし、簡単にはつぶされない。

三里塚は、日本の階級闘争の中心だと自負している。闘いこそが、自分の生きがいだし、死ぬまで闘いの中に身を置きたい。そして勝利を見届けたいと思っている。それほど

のためにもこの岩山の地から離れるわけにはいかない。

小川明治、柳川茂、木内武、皆それぞれ惜しい同志達を亡くしてしまつたが、彼らの分も引きついで最後まで闘いたい。そのためにもどんな労もいとわないつもりだ。

全国から若い力を

加茂平山 賢

三里塚は、今の社会の矛盾が最も集約されたところだ。われわれ農民は闘争によって権力の本質を知つた。暴力によって農民をおしつぶそうというのが権力だ。

当初は、平和が乱されるのがいやとか、住みにくくなるという事だけで反対したが、全学連との連帯がさらに闘争を進展させた。権力闘争として、全国的に発展してきた。



階(空港粉砕)にどう飛躍させるのか大きな課題だ。皆さんの闘いに、おおいに期待している。私も闘いぬく決意だ。

自主耕作運動も、そういう意味から有意義だし、頑張ってもらいたい。しかし、自主耕作運動が、単に畑を耕すというところだけにとどまっていればだめだ。次の段

立木と共に地面に

朝倉 渡辺義次

それで、三月六日の日のことですが、これは代執行当日に警察、機動隊による放水車による放水が立木に登っている人に向けられたことがありました。

つたときに、午前中に全部始末しまおうというよりなことが何回も聞かれたから、恐らく午前中だつたと思います。それで、放水を浴びたときは、証人の気持ちかなりな脅威に感じたんです。

最初放水したのは、朝の六時、まだ陽は昇ってませんでしたけれども、最初にあつたのは放水でしたね。

それから、放水をしながら今度は地面のほうではブルドーザーで地下壕の上のほうにこたはありましたか。

その放水というのは、立木に登っている人からだめがけて直接に水平に発射されたものでしたか。

ええ。地下壕の上はもう縦横無尽に走って歩いたように思います。それでかなりその中には人間がいるからやめてくれというのを、必死になって叫んだように記憶しています。

そのとき鎖で立木に縛っておかないと、吹き飛ばされるような状況でしたか。

放水を行なった後に、今度は証人の登っているけやきの木に対してどういう行動を、公団側はしたんですか。

ええ、吹き飛ばされるような状況だったし、朝も早かったし、その日はかなりの寒さでもって着物にかけられた水がそのまま固くなって、凍り付くような寒さで、手をつかんでも感覚がなくなっていく寒かったので、鎖で縛っていたと思います。

立木をロープで縛って、ユニボの腕の部分と結び合わせてから、今度はユニボの運転手はどういうふうにしたんですか。ゆさぶつたんですか。

このけやきの木が倒れたのは午前中のことですか、それとも午後のことですか。

それで、警察側では救急車に乗せて病院に運んだんですか。

はい。それで、落とされた直後に機動隊がやってきましたか。

救急車に乗せられて、成田の藤倉病院というところへ連れていかれましたか。

あつと機動隊が寄ってきて、こんな野郎さん世話をやかせやがってということだからけやきだと思いませんか。

私服警官かだれかがついていきましたか。私服警官らしい者が二人ついてきました。それで、藤倉病院でレントゲンをとつたわけですか。

このころから証人は意識を失いましたか。

はい。その結果、どういう容体だということがわかりましたか。

この時点からということは、はっきりわかりませんが、そのあとのある時間には記憶がないんですよ。時間の記憶がないです。

第二腰椎圧迫骨折。要するに、背椎の二環である第二腰椎が圧迫骨折を受けたということなんです。

気がついたときにはどこにいましたか。

はい。そのときに医師が私服警官に対して傷が重いとか軽いとかということについて何か話しましたか。

それは、公団分室だつたのでしょうか。

これは背骨だからかなり時間がかかりました。そういうことは、言つたのを聞きませんでした。

自分の寝ている範囲内しか見ることができませんので、かなり大きな広い部屋で板の間にじかに寝かされていたという事はわかりますけれども、そこが公団分室かもしれません。

そうしたら、私服警官の二人はどうしましたか。

そのときに当初外傷は目立ったものはなかったわけですか。

はい。裸にされて診たけれども外傷がない。これは逮捕だということを立てたことでもやられたけれども、立てなかったですね。



反戦の砦——三里塚を防衛し、二期攻撃を粉碎せよ

全国各地で日夜、帝国主義の戦争攻撃と対決し、人民を抑圧し、差別し続ける権力者への怒りを燃やし、人類の解放への息吹きを断やすることなく、戦闘的に闘い抜いている労働者、学生の方々!!

新東京国際空港建設の閣議決定から十六年を経た三里塚は今、日本帝国主義による、総力を挙げた三里塚闘争の解体、鎮圧という恐るべき攻撃を真正面から受けている。十六年このかた苦しめられ、いやそれ以上にわたって苦しめられ続けてきた三里塚農民は、今もなお、激しい攻撃の矢面に立たされ、あるいはまた、懐柔策という農民相互の反目、反対同盟の分断を狙った攻撃をかけられている。だがしかし、三里塚農民は明るい。生き生きと生活し闘っている。十六年にわたり苦し

められ、権力の本質を見抜き、農民や、被差別大衆の解放を心から願っているからであり、そのために自らの闘いに命を燃やしているからに他ならない。

そして、反権力、反差別、反戦の闘いを人民の最先頭になって闘い抜いてきた三里塚闘争の圧殺という攻撃が同時に、日本帝国主義が、今日抜きさしならない帝国主義の崩壊の危機にさらされ、それ故日帝にとって日本階級闘争の最大拠点、反戦の砦、三里塚闘争を押しつぶす以外に延命の道がないことを物語る攻撃であることを見抜いているからこそ、三里塚農民は、徹底非妥協であくまで闘い続けているのである。

今日、日帝は、朝鮮侵略反革命戦争と戦争体制づくり死活をかけ、核武装化、軍事大

国化への道を、軍靴の音を高らかに響かせながらひた走り、国内差別分断支配、国民総動員体制を目指し、その要として侵略反革命の拠点三里塚空港建設に全力を注ぎ、そのためにも、三里塚闘争の解体、二期攻撃を必須の課題として位置づけているのだ。

まさに二期攻撃、「話し合い」攻撃は、日本帝国主義の危機を表わすものに他ならず、マスコミや政治ブローカーをもまきこみながら総力でかけてきた攻撃であり、その性格は反対同盟総体を解体する攻撃として、具体的には、第二反対同盟条件派同盟の形成をなし、同盟を内部から切り崩し、屈服させようとする攻撃としてであった。そして、その攻撃の火の手は弱まるどころか、否むしる奥深く浸透させ、慎重にかけられてきているといっ

ても過言でなく、悪らつな攻撃なのだ。

われわれは、この二期攻撃＝三里塚闘争の解体攻撃を座して見過すことなどとうていできない。全力を尽して粉碎しなければならぬ。

反対同盟はすでに闘いの方向性を鮮明に打ち出している。「用地内」反対同盟の「話し合い」攻撃粉碎の地平をうけ、「空港絶対反対、一切の話し合い拒否」、「農地死守、徹底抗戦」、「二期阻止・空港廃港」を決意し、表明している。そしてその中で、反対同盟の一層の団結を打ち固めつつあるのだ。

七・四全国集会において、閣議決定十六周年弾劾として、もう一度、十六年前反対同盟が心底から日帝・政府・公団に対し、激怒し、空港粉碎に立ち上がった原点にもどり、今一度徹底して闘い抜くことを、「用地内」反対同盟を中軸とした闘いをやり抜く決意を打ち固めた。まさにこの二期決戦こそ十六年の闘いの一切の成果が結実するの否かをかけた分岐点であることを鋭く自覚し、闘わんとしているのである。

われわれは、三里塚闘争を、反戦の砦、反

帝共同闘争として全力で闘い抜いてきた。同時にその闘いは、反対同盟農民とりわけ「用地内」農民の苦闘に込める闘いとしてやり抜いてきたのであった。それ故、農民に徹底して学び、また決死の覚悟で闘う反対同盟と連帯し、日本階級闘争の拠点、内乱拠点を防衛せんとしてきたのであった。まさに今そのことが焦眉の課題としてわれわれに問われているのだ。一切の倭じゅんを排し、二期阻止空港爆砕を戦いとらねばならない。

まさにこの闘いは、日本全国を揺り動かす一大闘争になるだろうしならねばならない。八〇年代中期階級決戦の大きな幕開けの闘いなのだ。全人民の総決起を表現し、大衆的な力で克ち取らねばならない。なぜならそこに日本の労働者階級人民、被差別大衆の輝かしき未来をみることができるところである。圧倒的な大衆の力で二期を阻止せよ!!この具体的かつ現実的目標に全力を注ぎきり。帝国主義者が全力で二期を強行し、われわれを押しつぶそうとするなら、われわれ人民もまた、死力ですべてに挑み、必ずや三里塚を一大内乱拠点に、解放の地へと創出していくであろう。

せられた反対同盟の宣言である。

反戦の砦として、また反戦、反核の最先頭で闘おうとする反対同盟の決意は、十六年間築きあげてきた地平、すなわち、国家権力に対する実力闘争、武装闘争の一つの成果であり、「農地死守・闘魂必成」をかかげ、徹底非妥協で闘ってきた地平から発せられた言葉に他ならない。

三里塚闘争は、今日、日本階級闘争における天王山としての位置を確保し、日本の労働者階級人民、農民の最先頭で闘っており、そこにこそ、われわれの学ぶべき道標を見出すのである。なぜなら、あくなき国家権力との死闘、全人民の解放を願って闘っているからであり、同時に、日本階級闘争史上、画歴史的な地平を刻印しているからに他ならない。そうであるが故に、われわれは三里塚反対同盟を二期攻撃から防衛し、これを粉碎すべく反対同盟と共に連帯して闘わなければならない。

二期決戦は敵日帝・政府・空港公団が反対同盟の解体を至上目的としている以上、われわれは総力をあげて、決戦を貫徹しなければならぬ。三里塚闘争の歴史的地平を防衛し、新たな発展をかちとらねばならない。

われわれはここにおいてまずなによりも、三里塚闘争の地平、反対同盟が中軸となり、労働者の団結、共闘で切り拓いてきた歴史をふり返るなかから、学ばべき視点を定めなければならない。

大衆的武装闘争で空港に

壊滅的打撃を

三里塚闘争は反戦、反核の最先頭でた

かう。これは七・四閣議決定弾劾集会で発

実力闘争、武装闘争の 更なる発展を

「今、われわれはカマを振り、竹ヤリをか
ついだ。国家権力の弾圧から自分を守るため
に武器をもって立ちあがったのだ。六八年六
・三〇全国総決起集会における青年行動隊の
決意表明は、反対同盟自らが武器をもち、実
力闘争、武装闘争に決起し、徹底非妥協で闘
い抜かんとする武装宣言であった。

これと前後して、六七年一・三「三里塚
空港粉砕、ベトナム反戦青年集会」を一つの転
機として、常に実力闘争を否定し、空港粉砕
闘争を条件闘争にねじまげんとしてきた日本
共産党と訣別するにいたり、三派全学連、反
戦青年委員会との結合、共闘を実現した。

そしてその全学連、反戦を中心として全国
的に三里塚闘争の実力闘争、武装闘争として
の発展の幕開けを六八年二・二六、三・一〇、
三・三一と連続した公団分室突入闘争として
実現したのである。

反対同盟の武装宣言以降、人民の武装の正
当性を身をもって実証していく形で、ありと
あらゆる手段を駆使しながら（例えばふん尿
、黄金爆弾）、実力的、武装的發展の道を突
き進んでゆき、強制立入測量阻止闘争を、三
日間戦争という形で貫徹するのである。

三里塚闘争の武装的發展の中で、反対同盟
は創意工夫をこらした戦術で闘いに挑む。第

一次代執行阻止闘争では、地下壕戦や、立木
バリケードに自らの体を鎖でしぼりつけたり
しながら実力で闘っていったのである。それ
で第二次代執行においては、駒井野、天浪、
木の根の若死守戦を貫徹しながら他方で、東
峰十字路における機動隊に対する武装遊撃戦
を闘い、機動隊三名のセン滅と大隊に非常な
打撃を与えた。

まさに三里塚闘争の実力闘争、武装闘争の
一つの金字塔を打ち立てたのである。
更に今日に到るまで、七七年鉄塔決戦一五
日間の武装的闘い、七八年開港阻止決戦一横
堀要塞戦、管制塔占拠、破壊の闘いとして、
着実にかつ大胆に、武装的發展を実現し、三
里塚闘争の今日の偉大な地平を築いており、
更なる内乱的發展の中に必ずや三里塚を人民
の内乱の、解放の一大拠点にしてゆかねばな
らないことが問われているのである。

反戦の砦——三里塚闘争

三里塚闘争は当初から「軍事空港反対」を
掲げ、北富士闘争、砂川闘争などの連帯を
深めながら一貫した反戦の闘いの地平を切り
拓いてきている。そしてそれはベトナム反戦
闘争や七〇年安保闘争なども結びつきを深
めながら、着実に反戦の砦としての位置を物
質化しながら全国的な反戦運動の高揚を導き
出してきた。同時にまた三里塚闘争自身にお

いても不断にその反戦を闘い抜く中で、空港
絶対反対の旗いろを鮮明にしつつ、自覚的に
空港粉砕を闘い、日本階級闘争における中軸的
闘いをにない抜いていったのである。それは
部落解放同盟、全陣連といった被差別大衆と
の連帯を実現し、全人民の結集軸として、一
つの内乱拠点としての發展を実現してきたの
であった。

三里塚農民にとって「反戦」とは直接的に
は戦争体験者としての戦争反対でありそのた
めの軍事空港粉砕であったし、同時にアジア
朝鮮への侵略に反対する中身をもって語られ
るのであるが、三里塚闘争の国家権力に対す
る徹底非妥協、徹底抗戦の実力的、武装的闘
いが、今日の反戦運動を担い抜くものにとっ
て、むしろ主体的問題とされなければならな
い。

まさに反戦の砦——三里塚闘争が一つの反権
力闘争、反帝闘争としての闘いを実現してい
るが故に反戦の砦なのであって、この地平を
防衛し、發展させることに全ての闘いを向か
わせていかない限り、反戦・反核運動は空語
に終ってしまうのである。その意味で三里塚
闘争は同時に、反帝共同闘争の中軸でもある
のだ。

また八〇年五・二〇現地集会において「三
里塚を日本の光州に」というスローガンを打
ちた。韓国・学生・労働者・市民の武装
闘争に自らの姿をみだしこれと連帯してい
くという国際主義的な視座を確立しきったの
である。

このように三里塚闘争は、その闘いと内身
においてすぐれた反戦、反帝の思想を有し、
国際主義的な方向性をもって闘われてきてい
るのである。

家族ぐるみの闘い、 土地・農業を武器とし た闘いに連帯しよう

三里塚闘争は、反対同盟という組織的団結
を中軸にしながら、家族ぐるみの闘いとして
貫徹され、同時にその中で家族をあげて、部
落をあげて、農民として土地をあるいは農業
を武器とした闘いとして貫徹されてきた。

反対同盟の結成をもって闘いに立ちあがっ
た反対同盟は六七年八月婦人行動隊、少年行
動隊、九月老人行動隊の結成をかちとり、闘
いの前進とともに着々たる戦闘態勢を整えて
いったのである。

封建的、家父長的に親父が闘いに挑むのみ
ならずむしろ闘争の前面にはおっかあらが、
少行があるいは「老人決死隊」のはちまきを
しめた老行がたち、家族ぐるみの闘いを貫徹
してゆくのである。

家父長的家族制度、農村共同体的枠を、戦
闘的団結へと飛躍させ闘ったのである。それ
がこの闘いは、自ら農民として農民の全生活
をかけた闘いであるが故に、土地をあるいは
農業を武器にして闘われ、創意工夫ある闘い
をつくり出し、反帝の一大拠点への形成への
決定的要因として全国の労働者・学生・農漁

民の闘いを鼓舞してきたのである。
帝国主義農政の農民切り捨て攻撃を粉砕し、
全人民の解放への拠点としての役割りをにな
える一個の地平を築きあげたのである。

社・共・カクマルとの 訣別

反対同盟の闘いが実力闘争、武装闘争とし
ての發展をかちとり、三里塚農民の闘いが一
つの自然発生的ではあれ、革命の萌芽を形づ
くりつつあったのに対し、日共はその革命的
萌芽の芽をつみとり、敵前逃亡を開始し、反
対同盟から訣別宣言をうけた。また社会党も
議会主義政党として実力的武装的發展の前に
当初一坪共有地運動、立木の共有化運動を推
進しながらも、次第に党的とりくみを放棄し
てしまった。カクマルにあっては、三里塚農
民の闘いを「小ブル農民のエゴ」として切り
捨て、一貫して三里塚闘争に対する反革命的
敵対をなし、反対同盟から永久追放宣言をう
けている。

このように反対同盟の闘いは、明確に、社
会排外主義者と一線を画し、いな積極的に闘
い抜くことを通して日本階級闘争における一
つの社会排外主義粉砕の確信をつかんだと言
える。

このように三里塚闘争の十六年の地平は、
戦後日本階級闘争史上に、輝やかしき金字塔
をうちたて、そこに日本労働者階級人民の

すばらしき未来を写し出してきたのである。
そしてそうであるが故に三里塚は日帝の全ゆ
る攻撃に対しても、人間要塞、徹底抗戦をか
かけ全人民の結果をかちとりながら非妥協に
闘いつづけているのであり、われわれはこの
三里塚闘争の歴史的地平を、一つの出来事に
とどめるのではなく、わがものとしながら、
実力闘争、武装闘争をもって反戦の闘い反帝
の闘いをにないぬかねばならず、それなくし
てわれわれの未来はないことをわが身にきざ
みこまなくてはならない。

激化する二期攻撃を 粉砕せよ

三里塚闘争の以上のような地平は、日帝に
とってなんとしてでも圧殺し解体しなければ
ならないものとして位置し、それ故悪らつか
つ兇暴な二期攻撃の激化として攻撃がしかけ
られてきている。

「話し合い」攻撃は昨年来、反対同盟をゆ
さぶり、今日にいたっては公然と第二反対同
盟条件派同盟の結成を射程に入れ、反対同
盟に対し、各個撃破でなく、同盟総体を屈服
させ、解体せんとしてかけられてきた。具体
的には、反対同盟元幹部、石橋、内田両氏に
標準をあて、悪質政治ブローカー西村を利用
し、第二反対同盟の結成を実現しようとして
きたのである。

空港絶対反対、を掲げ闘い抜いてきた反対同盟は、この攻撃を、「用地内」反対同盟を先頭にものみごとになり砕いたのである。より一層団結は強化された。歴史的に瀬利副委員長長の脱落、岩山十二戸の脱落等、反対同盟は数多くの試練を、組織的団結の強化をもって克服してきた。その成果をもって石橋、内田両氏の解任己自を批判書の提出という形で結着づけ、更に浸透せんとする「話し合い」攻撃を完ぶなきまでに粉砕したのである。

また成田用水攻撃という菱田地区にかけられた同盟分断攻撃に対しては、青年行動隊を中心とした戦う農業建設の闘い、自前の暗き

「用地内」反対同盟の苦闘と 決意に込めよう

三里塚空港建設の攻撃は、富里農民の激しい抵抗の中で、戦後開拓で農業的展望がたてにくく、かつ農地への執着が少なからざるという見込みを立て「用地取得が比較的容易である」として位置決定し、かけられた。だがそれは、六〇年代高度成長期における「農基法農政」に富里育成、貧農切り捨てという農民殺しの攻撃のもとかけられた攻撃なのだ。まさに一切の矛盾を貧・中農層に集中し、農民を切り捨て、農業破壊、農民殺しの意図をもって強行されてきたと言える。

よ排水工事の貫徹をもって闘いにたちあがっている。

更に一坪共有地買収策動、公団用地貸付け攻撃などが二期攻撃として、反対同盟分断、解体攻撃としてかけられてきているが、反対同盟の力強い闘い、自主耕作運動の中で破産を宣告されているのである。

われわれは二期攻撃が激烈になればなるほど、反対同盟がその真価を発揮し、粉砕していることに注目しなければならず、ここにこそ連帯の視座をみだし、革命的労働学共闘の更なる発展をかちとらねばならない。

決意に込めよう

そしてそれはその後における七〇年代「総合農政」への転換の中でも一貫していえることであり、今日にいたっては、滅反強要、農産物自由化等を巡り、農民総体に対する矛盾の集中は目をおおむねかりである。

三里塚においても農業破壊、農民切り捨ては今日にいたって更に激しくかけられている。用地内の土地を、表土をけずり、あるいはベトナム戦争時使用された枯れ葉剤、ボロシル4を用いて、除草を名目としつつ、農地そのものを使えなくする攻撃や、公団の買収した

用地を農民に貸与し、農民相互の反目を生み出さんとする用地貸し付け攻撃、更に決定的には懸特法をもって農業どころかそこに住むことすら許さないという農民叩き出し攻撃は、だがしかし「用地内」反対同盟の不屈の闘いの前に破産を宣告されているのだ。「用地内」反対同盟は、空港粉砕闘争の中で、同時に一貫してこのような農業破壊、農民叩き出しの攻撃とも先頭になって闘い抜いてきたと言えるのだ。まさにその中で権力に対する、その本質を見抜き、いい知れぬ苦闘を、怒りとして表現し、常に反対同盟の先頭を担って徹底抗戦で闘ってきたのであり、われわれはそこにおける「用地内」反対同盟の苦闘に学び、今日発せられる決意に込めてゆかなくてはならない。

「そのときつくづく思ったのは、こりや政府のあるいは公団のやる仕事はろくなものじゃない、と。絶対に許すわけにはいかない。もう土地が武器である、土地が要塞である。絶対に土地は売らんという決意をそこで固めたわけです。

若い小僧っ子（注：警察官）によ、鉢巻とれとかとんないとか、そういったことでけとばされ、ピンタをくったなんでもってのほかだ。絶対に許すわけにはいかない。今もしゃくにさわってしょうがない、本当に。」

これは木の根反対同盟小川源氏の七〇年外郭測量阻止闘争で捕まった時の回想の言葉で同時に源さんが本格的に徹底抗戦を決意した言葉である。

現在源さんは、木の根の土地に、七郎さん直克さんらとともに、木の根三戸不動なりとして、「一坪の土地も売らない」と頑張り抜いている。木の根は昼夜を分かたぬ機動隊による監視と空港の騒音にさらされ、非常な苦闘を強いられている。飛行機の離発着時の騒音、夜中はエンジンテストの低周波騒音とぐっすり眠ることすらできず、またとくに機動隊による検問は、木の根から一歩外へ出る度に、これでもかこれでもかと言わんばかりに執ように行なわれ、幼稚園の送り迎えの車に対しては三十分一時間は必ず行なわれるという悪どい手口でもってかけられているのだ。

だがしかし源さん始め、家族の人達あるいは木の根三戸の闘いはこのような弾圧にも屈せず、むしろ生き生きとして闘い、「死んでも土地は売らない」決意をもって、「小川源は一坪の土地も売らない。本当に闘おうとするものはこの小川源についてこい」とわれわれに對する鋭い檄を発している。この決意に込めることこそ、本當に闘いを貫徹せんとする者なのだ。

同時にこの小川源さんはじめ、十四戸の用地内」反対同盟はほとんどが戦前、戦後の開拓であり、様々な人知れぬ苦闘を背負ってきた人達なのである。「朝星夕星」という言葉は開拓当時の苦闘を端的に表現している。つまり朝、明けの明星が出てから、夕方、よいの明星が出るまで、一日中働いているということなのである。そして一畝一畝、荒地を耕

し、一反歩耕すのに約一ヶ月もかけ、おがみという掘立て小屋に住みながら、大変な苦闘をしてきたのである。そのような開拓の歴史が一人倍土に対する愛着と絶対農業をつづけていく決意となり、同時に不当にかけられてきた空港建設に対して、政府・公団のでたらめさを知らうちに、反権力の思想を身につけ、徹底非妥協の精神、人間要塞、徹底抗戦の思

侵略反革命の拠点—— 三里塚空港を粉砕せよ

六五年日韓条約締結を決定的メルクマイルとしつつ、日帝は朝鮮、アジア侵略反革命を本格的に開始した。

それを前後して、自衛隊制服組が六三年、中国・朝鮮民主主義人民共和国を仮想敵国として、経済、交通、通信など戦時立法を図上研究した。いわゆる「三矢研究」である。以降各分野での有事に備えた検討、準備が行なわれたのである。

三里塚空港建設はこのような日帝の侵略反革命体制構築のための環として行なわれ、侵略反革命の拠点としての本質を有しているのである。

羽田過密論がさければ、SSTの離発着を可能とする空港の必要が訴えられたが、実際は、羽田の利用状況も当時の予測を大巾に下

想で武装していくことになるのだ。

われわれはこのような「用地内」の苦闘に断固として学び、現在かけられている農業破壊、農民殺しの攻撃、二期攻撃との闘いを、「用地内」反対同盟の決意に込めるものとして闘う必要があるのだ。

全力で木の根へ、そして「用地内」へ支援する力を組織し込め抜こう。

回り、SSTも製造中止になる中で空港建設の単なる口実に他ならなかったのだ。

その本質は「(民間空港ができて)滑走路の本数が多くなることは抗たん性(抵抗力)が増す、空港はほとんど作ってほしい」、航空管制も法(航空法)にしばられ、管制も一元的にコントロールできない。民間空港も緊急時に使えるよう戦時立法がある(七六年夏「自衛隊戦わば」)このような野望の下に、三里塚空港の必要性が課題となっていたのであり、運輸通信網の整備や、日米安保体制下の法的地位協定に基づく米軍を含む軍事物資の輸送を担うという軍事的側面、あるいは帝国主義間覇権争闘の激化の中で、航空宇宙産業、情報産業における先端技術部門での国際競争力の強化、航空路シェアの拡大等い

わゆる侵略反革命体制構築のために建設が強行されてきたのである。

既に知られている通り、ベトナム戦争時、羽田利用の四〇％は米軍機でしめられており、七九年東京サミット時には自衛隊機、米軍用機が成田空港に離発着しており、また七八年一月三十一日明らかになったが日米地位協定に基づいて米軍郵便物取扱所の設置が画策された。更に今日、リムパック82に参加する米海兵隊が大挙、成田空港を利用して、このように具体的、現実的に、日帝の三里塚空港建設の意図は貫徹されており、まさに反人民的の目的のために建設されたと言える。

同時に、今の三里塚空港に目を向けてみると、空港がいかに反人民的の代物であるかは一目瞭然である。空港を二重にとりまくフェンス、どこを見渡しても機動隊が目につき、周辺地域にまで機動隊が見回りと呼んで、弾圧を加えてゆく。一県警に匹敵する一五〇〇もの機動隊と、ねこの子一匹もれさせぬ頑丈な設備をもって空港を維持しているのだ。この

二期決戦貫徹！

全国の同志、友人の皆さん！われわれの闘いの方向性は、二期阻止！空港爆破！である。それに向け、全力で戦闘の準備をし、遊撃隊

ことを反人民的と言わずして何と言えよう。このような侵略反革命の拠点として三里塚空港があり、反人民的なものであるということは、反対同盟始め周辺住民に対して、農振策だとか称し、空港と農業の「共存共栄」を唱い文句に、三里塚空港の既成事実を押しつけ、更に二期完成をもって農民を更なる苦境へあるいは叩き出すとしていることの中にも現われている。

まさに三里塚空港の強行開港、二期への攻撃は、侵略反革命の拠点の建設であり、反人民的の遂行である。と同時に十六年このかた闘われてきた三里塚闘争が日帝、政府、ブルジョアに対して最大の闘争拠点となつたが故のこの闘争に対する破壊、解体攻撃であり、農業破壊、農民殺しの攻撃なのだ。三里塚農民は闘い抜いている。それは土地を奪われるからだけではない。この空港の本質が示すように命をも供出を要求されるからであり、誰よりもましてそのことを、三里塚農民は肌身に感じているからに他ならない。

空港突入—— 解体戦へいざ

の結成をなし、全ゆる手段を駆使し空港にせめぬらう！

この二期決戦を闘うにあたって以下の点を

確認しよう。

第一に、今日高まる反戦、反核運動の更なる高揚を、反帝反戦闘争へとそのムーブメントを結集させねばならず、その重要環として三里塚闘争、二期決戦貫徹するということである。三里塚闘争の反戦の砦としての形成反帝共同闘争としての地平を踏まえ、「三里塚闘争を闘わずして真の反戦、反核闘争はありえない」ことをもって、今日の反戦、反核闘争の中に切り込み、組織することである。三里塚二期決戦には八〇年代中期階級決戦の帰すうがかかっている。三里塚闘争十六年の地平を防衛、発展させ、必ずや二期決戦の大爆発を実現しよう。

第二に、三里塚反対同盟とりわけ、「用地内」反対同盟の苦闘に込め、二期決戦を「一切の話し合い拒否、空港絶対反対」の原則を貫くものとして闘おう。昨年来の「話し合い」攻撃と、それと対決し相次ぐ、公団、運輸省の現地潜入を敢然と粉砕し、ふりそぐ弾圧をはねのけ闘い抜く「用地内」反対同盟と連帯して闘わねばならない。「オレについてこい」という小川源さんの言葉に込め、源さんと共に、源さんを守りながら徹底抗戦の闘いを実現しよう。「話し合い」攻撃粉砕、成田用水、農地貸付粉砕を反対同盟と共に闘い、二期攻防に打ち勝とう！！

そして第三に、一、二の闘いを実力闘争、武装闘争として闘おう！三里塚闘争の歴史は一言で言えば実力闘争の歴史であった。同時にそのことが全国の労働者、学生、住民運動

を闘う人々の心をゆり動かし、鼓舞し、三里塚へ結集させ、そのことよってまた数多くの実力闘争、武装闘争を実現してきた。

実力闘争は死力を賭して実現しなければならぬ。反対同盟は自らの体をはって抵抗し、闘い抜いた。「土地に杭はうたれても、心に杭は打たせない」と杭打ち地点に腹ばいになって座り込み、ふん尿をかぶりながら闘った。大木よねは、脱穀機にしがみつきの、最後まではなさず闘った。こずかれてもけられても決してひるむことなく闘ったのである。大木よねは死んだ、虐殺された。だが彼女の生前は三里塚闘争が生んだ偉大な戦士として永遠に歴史の中に刻み込まれるであろう。それは「おらの身はおらの身であっておらの身ではねえ、反対同盟さ、身預けただから」ではじまる闘争宣言を発し、実力で闘ったからだ。

三里塚闘争の中で死んでいった幾多の同志の無念をはらすためにも、絶対に空港を許すことはできない。実力闘争、武装闘争の爆発で空港を廃港にしよう。

そのことは幾多の困難が供なうかも知れない。だが機動隊の守る砂上の楼閣は、三里塚に心をよせる万余の大衆の実力闘争、空港突入——解体戦の実現で必ずなしとげられる闘いなのだ。

反戦、反核集会を上回る全人民の武装決起、大衆的力の一大結集で空港突入——解体戦を実現しよう！！
このことがわれわれに課せられた、また唯一の結論である。

岩山団結会館利用案内



◎滞在費

一日 三百円（一食込み）※八日目からは食費のみ

◎食費

一食 一五〇円

（ただし会館でとる場合）

◎援農、耕作時には、汚れてもかまわない服、運動ぐつ（地下たび、長ぐつ）、着替え等を持参して下さい。

◎住所 千葉県山武郡芝山町朝倉

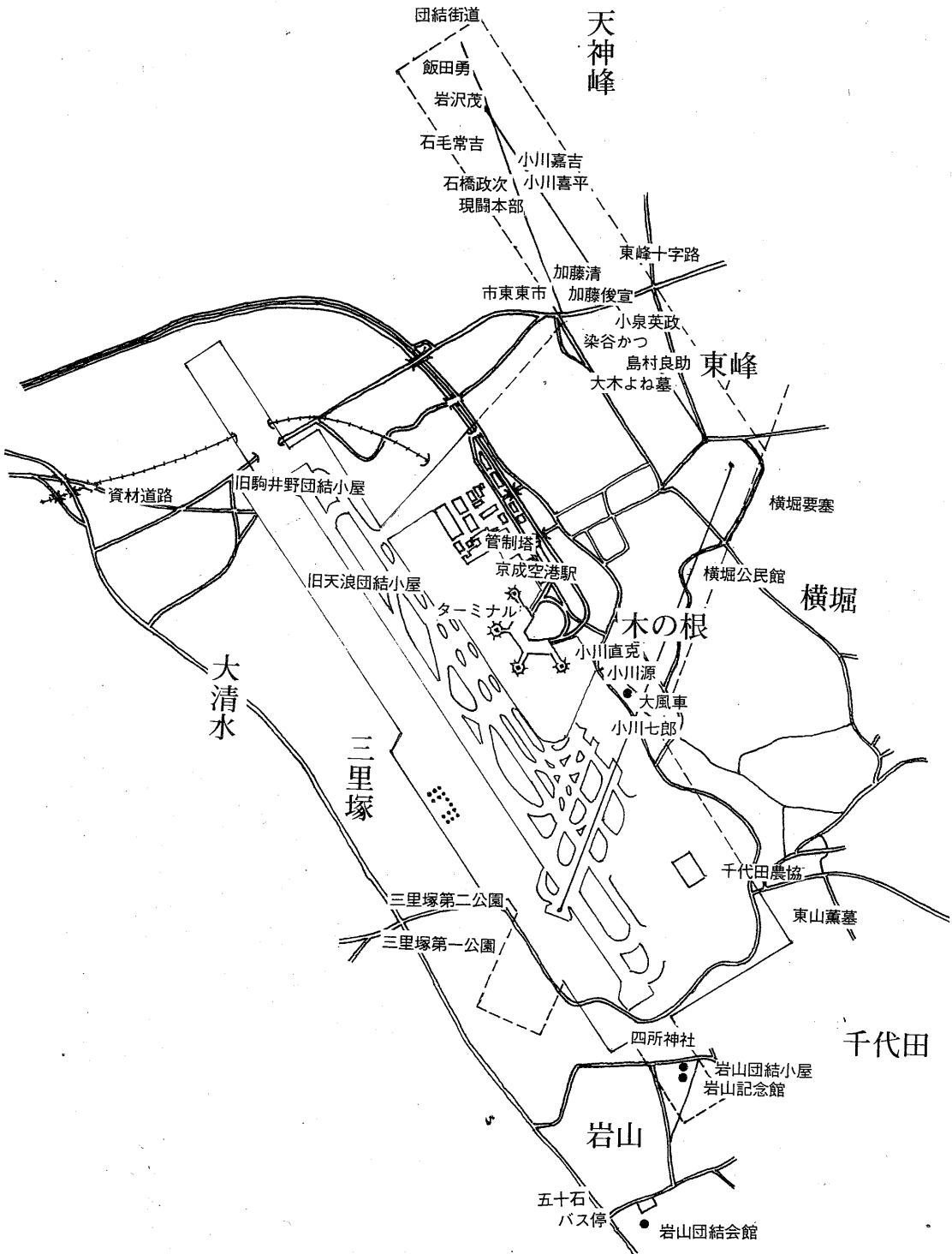
三九四

◎電話

(〇四七九七)

七一二一六三

三里塚現地案内図



二期を計すな。三期備置準備料のために。一九八一年六月二日発行。三期備置準備料。青山印刷製本。千原山製本。印刷局。CINQUE。定価 五〇〇円

